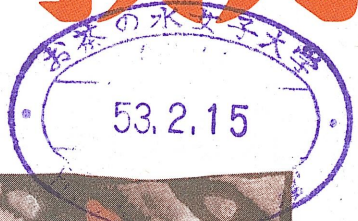


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

3



第七十七卷 第三号 日本幼稚園協会

# 夏の ヨーロッパ 視察旅行 15日間

8月11日～8月25日



主催

フレーベル館現代幼児教育研究会

日本交通公社 国内 団体旅行新宿支店

今年の夏、幼児教育発生の地

ヨーロッパを訪ねてみませんか。

フレーベル先生の遺跡（東ド

イツ）や、ペスタロッチ先生の

遺跡（スイス）を視察しながら、

ヨーロッパのメルヘンと自然に

触れる旅を計画しました。

## 経路

東京↓アムステルダム↓東西ベ  
ルリン↓エルフルト↓オーベル  
バイスバツハ↓バートブランケ  
ンブルグ↓リュースハイム↓  
コブレントツ↓フランクフルト↓  
チューリッヒ↓ウィーン↓パリ  
↓東京

期間 昭和53年8月11日～8月25日

人員 40名（定員になり次第切）

費用 五九八、〇〇〇円（ローン可能）

尚、詳細については、フレーベル館  
代理店又は、支店に資料をご請求く  
ださい。

お問い合わせ（TEL）は

●フレーベル館・東京03―二九二―7781

●日本交通公社・東京03―三四六―0170

# 幼児の教育

第七十七卷 第三号





幼児の教育 目次

——第七十七卷 三月号——

© 1978  
日本幼稚園協会

表紙 梶山俊夫  
カッ ト 中島英子

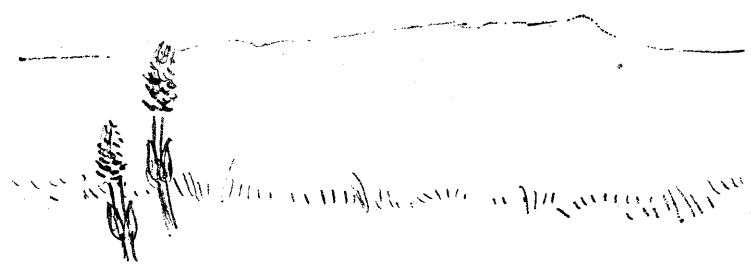
乳幼児を育てる社会づくり……………岡田 正章……………(4)

対談 最近の教育はさっぱりわからない

浅野順一／周郷博……………(8)

春の七草のこと……………和田 陽平……………(24)

ひとりひとりの子どもを見つめて(最終回)……………赤羽美代子……………(27)



ことばと幼児

——読書について——

村石 昭三…(30)

「黒いノート」より

村田 修子…(36)

私の保育

小林 暉親…(38)

オーストラリア・ニュージーランドの幼児教育

津守 真…(42)

★海外文献紹介

(48)

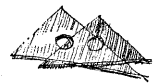
図書紹介

(52)

飛ぶ折り鶴

伏見 満枝…(53)

## 乳幼児を育てる社会づくり



岡田正章

「社会づくり」という得体の不明瞭なことばを用いて恐縮に思う。筆者が、あえてこんなことばを作ったのは、いまのわが国の一般的風潮また公けの組織が、どうも乳幼児が健やかに育っていくのに無茶苦茶なものになっているように思われ、このため、世なおしにも価する大きな改革を訴えたいからである。

そのまず第一は、この世に始めて呱呱の声をあげて出生してきた赤ちゃんを、生みの母親は自分の懐のなかであたたかく育てたいという気持ちをとだけ強くもっているのだらうか。乳児保育所を増設せよと主張した母親グループのひとたちが、生後一か月足らずの子どもは、眼も見えず、母親か保母かの区別がつかないのだから、特別に母親

が育てることの意味はないという発言をしていた。乳児の心を、このようにとらえること自体、大変な独断である。それ以上に、この子の傍に居て、その身の世話をしたりやりたいという献身的な気持ちがあることも見られないのに、恐怖を感じた。

何かがそうさせている。収入を多くするよう働く必要があるとしても、「赤ちゃんを自分で育てたい気持ちがあるのだけども」という発言をするのが、人間的な姿ではあるまいか。

子どもを育てることが、何かしら、他から押しつけられたやむをえないもののようにしか思われていない風潮がある。世のなかがどんなにめまぐるしくなろうとも、子ども

を育てることを社会に対する権利として、それがやり易くなるよう求める姿勢こそ基本的と考えるようでありたい。

このためには、単に、人材確保の目的で、学校の女子教員、福祉施設の保母、病院の看護婦に認められた産後一年間の育児休業制度が、広く、子育てのチャンスを保障するよう、すべての女子就労者に適用されるようになることが望まれる。赤ちゃん保育を、保母一人に赤ちゃん三人という保育条件で充実していくと、赤ちゃん一人に要する一か月の費用は十四万円を超すこととなる。かつ、母親の月収は内職で四万円前後にすぎないという事態がある。復職を保障する労働基本権の改革という観点から、子育てを家庭の座にきちんと位置づけることを熟慮したい。

このことは、保育所に入っている乳幼児が疾病にかかって看病を必要とする場合、また、毎日の送迎時刻が一日八時間の保育時間を超えるような場合などについても、同様の原理で対処できるようにしたい。すなわち、前者では看病のための休日が請求できるようにする。後者では、八時間に合うよう遅参早退ができるようにするなど、それにふさわしい方法を子どもを育てる勤労者の権利として確保する。

ただ、このような提案に対しては、だから女子はいざというときに当てにならないという目でみられ、男女が平等に働くことを阻害する原因をつくることになるとの反論が示されるであろう。もし、わが国の男女を含めた労働者の団結の力で、こうした阻害を防止することができないとするのであれば、育児・疾病看護・遅参早退の請求権利を、母親だけでなく、夫婦が協議して、父親が請求することができるようにし、それを男子勤労者が実行するようにすればよいだろう。国民がやる気になれば、労働基準法のなかに、現在一日投乳時間が一日一時間認められていると同様に、そうした規定を同法のなかにとり入れさえすればよい。しかし、これも、単なる甘えの心を前提にするものであってはならない。公正についての高い倫理感が、一人一人の人生観のなかに秘められていることが要である。

右のような子育てについての意識・組織が成立したとしても、障害をもっている保護者、終始研究・訓練を継続することが緊要な高度な専門性をもっている母親・保護者などについて、赤ちゃん保育、八時間をこえる保育時間の保育は不可避である。それは、限りなく多くなるものではない。これに対しては、保母数の増加などで保育の万全を期

すべきである。反面、これに要する費用は、保育所を利用することによって得た所得に即して応分の負担を保護者がする。

他方、一定年齢以上の幼児に対しては、集団幼児教育の機会を均等にするという観点から、保育所・幼稚園の充実・普及さらには刷新を図るべきである。将来はともかくとして、当面は、四歳と五歳との二年保育を全幼児に保障することが課題である。

文部省が厚生省の協力を得て行なった、昭和五十一年度の「全国幼稚園・保育所の設置状況」は、次のことを明らかにしている。全国平均で、幼稚園・保育所に在園している幼児は、三歳児は五二万人で三歳人口の二五・七パーセント（幼稚園に六・六パーセント、保育所に一九・一パーセント）、四歳児は一五三万人で四歳人口の七六・一パーセント（幼稚園に四八・七パーセント、保育所に二七・四パーセント）五歳児は一七五万人で五歳人口の九〇パーセント（幼稚園に六四・六パーセント、保育所に二五・四パーセント）となっている。四歳児と五歳児の大半はすでに公・私立の幼稚園・保育所の何れかに入園しているということである。未だ入園していない五歳と四歳とが少しでも

早く入園できるよう、幼稚園・保育所の整備が望まれる。

ただ、こうした普及の実態のなかに、今後改善し、国民が公正に、ひとしく幼児を育てる社会づくりを行なういくつかの問題点がひそんでいる。まず第一に、幼稚園と保育所との関係である。保育所が一日八時間を原則とする保育の場であることは、働らく母親がいる限り社会的な要請にこたえるために重要である。しかし、八時間即教育は無理だ、子どもを怪我させないよう世話しているところとするひとが、いまなお少なくない。とくに、保育の動向を勉強していない行政担当者にそうした見解にとらわれているひとが多い。八時間のなかで、幼児の緊張・解放のリズムを適切に組み合わせ、年齢相応の幼児教育を行なうことは、保育者の専門性にまつところである。幼稚園と保育所とで幼児教育の質的水準に格差があるというイメージを一刻も早くとり除く社会づくりが重要である。このためにも、幼稚園教員が免許法にもとづく免許状取得者に限られていると同様、保育所保母も、目下全国保育協議会等が成立を期して運動している保育所保育士免許法の早々の制定が望まれるし、幼稚園教員同様の研修の機会が名実ともに充実するものとなることなどが望まれる。



第二に、公私立幼稚園の間にみられる保育料など保護者の費用負担の大きな格差、また、保育所保育料と公・私立幼稚園保育料との間にひきおこされている諸問題の公正な解決が望まれる。幼稚園振興計画が進められるなかで、市町村長の一部には、既存の私立幼稚園によって当該地区の幼稚園の需要が満たされているにもかかわらず、新たに公立幼稚園を一億円以上の公費を投じて設置し、このため、既存の私立幼稚園の幼児が公幼に移って廃園の余儀なきに至らしめるものがあると聞く。こうした建設費は公費の濫費の極まるものである。国民の公幼を求める声のほとんどすべては、公幼ならば保育料が安いということからのものである。もし、建設費に一億円以上の濫費をするゆとりがあるならば、その一部を私立幼稚園の保護者負担の軽減にあてれば、私立幼稚園の余儀ない廃園をひきおこすこともなく、また、保護者もその希望がかなえられるであろう。

また、市町村長のなかには、保育所保育料を国の定める金額以下とし、その軽減をはかっているところが少なくない。費用を安くしていくこと自体は結構である。ただ、それが、既存の幼稚園とくに私立幼稚園における保護者負担

の軽減に全く手をふれないなかで進められる場合、公正を欠くこととなる。今日、保育所と幼稚園とを用いている家庭の経済的状況はほとんど相違がない。かつ、保育所において幼稚園同様の幼児教育を行なうことが一つの既成事実となつてきており、国民がひとしく望むところともなっている。したがって、公費の支出は、公私、幼保の何れに幼児を入園させるとしても、保護者負担に格差がおこらないよう、総合的見地からの施策を進めることが強く望まれる。幼児を育てている家庭に対し、住民がこうしたことに積極的に協力する社会づくりを推進したい。

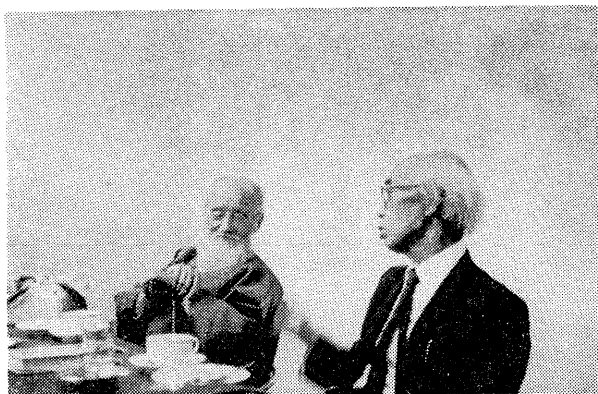
このような施策が進められるなかで、やがて幼稚園と保育所とが新たな発想によって再編成され、家庭における正しい指導、地域社会での豊かな経験などが相携えて、わが国の幼児が、出生から小学校入学までの間に、豊かな人間性の基礎を培われて成長していくことを確保したい。

(明星大学・宝仙学園短期大学)

対談

# 最近の教育はさっぱり わからない

浅野順一／周郷 博



浅野順一先生は、教会の牧師さまです。

岩波新書の『ヨブ記』、『詩篇』の御著書を通じて、御存知の方も多いことでしょう。

先生は、明治三十二年（一八九九）、十二月十二日のお生れで、現在七十八歳でいらっしやいます。今でも日曜日には、砧教会、そして新泉教会を交互に行かれ、日曜礼拝の説教をなさっております。また、昨年末には『モーセ』（岩波新書）を御執筆になるなど、心の張りを失われない研究者でもあります。

中国の旅から帰られたばかりの周郷先生と浅野先生とのこの対談は、赤間さんの尽力でこのような記事にまとめることができました。

—— 編集部

秋晴れのある午後、排気ガスがよどんでいるような六本木の街角からほんの少し奥へ入ったK会館の一室で、浅野順一先生と周郷博先生にお話をうかがいました。ここも都心には珍しく緑にかこまれ閑静な場所

でしたが、それにもまして少し興奮気味の周郷先生と話される浅野先生のもの静かなようですが、とても印象に残りました。

まず、お若いころに浅野先生のお宅に三年ほどいらしたとおっしゃる周郷先生に「あなたはどうして私の家に來られたの？」とやさしく浅野先生がお聞きになって、この対談が始まりました。

昔がたり——浅野先生とめぐり合う

周郷 私は小さいころ新聞配達をしたり、夜学の電機学校へ通ったりいろいろなることをしました。中学を出ていませんでしたから……。そのころ中田重治という人のホーリネス教会で洗礼を受けてるわけです、十二月、クリスマスのごろです。

浅野 ほう、そう……。

周郷 今考えて見るとあの洗礼は激しい洗礼でした、棺桶みたいな木の桶に水が一杯

入って、白い着物を着せられてそこへゴボンと入れられちゃうんです。そういうことがあったんですけれど、それは、生れた家がいろいろな意味で悲惨、というか金がないで、捨て犬のように夜学の帰りなんかブラブラ歩いたりなんかしていました。

受かっちゃいました。それで一高を受けたけど落っこちましたよね。そして次の年一高へ入りましたけれど、一高っていうのに何となくあこがれた……ですね、寮の生活にあこがれただけで勉強しようというわけじゃなかったんです。ともかく三年でいい友だちもできました。ヴァチカンでローマ法王に一番信頼された金山政英君（韓国大使を最後に退官）なんかもそうですし、なくなった小田急の副社長の利光君とか……。

周郷 ええ。十三で洗礼を受けて……、その電機学校を二年半で終えると最低の技術者になれるわけです。その終りころには東京電力の両国の、電気タマ、つまり電球なんかを作る所にいました。ところがたまにまぼくの知合いの電気工夫をやってる人が世話してくれて市川の変電所へ行きました。変電所ですから田んぼの中で自炊してるわけです。その翌年が関東大震災でした。それはぼくが十五歳の時です。

周郷 本郷です。本郷の最後に近いところで。寮も古い寮ですね。きたないけれど精神がありました（笑）。今は建物はいいけれど精神がどこか抜けて物質主義……

浅野 一度行ったことがあるけれど……きたならしい所でした。

周郷 ガラス戸も割れているし、二階から小便（寮雨）と称した）をするんです。

だから雨あがりて暖かくなると臭いわけです。それでも今の寮よりも精神はありません。明治精神というような。

ところが東大へ入ったら……ぼくが東大へ入ったのは昭和五年、一九三〇年、日本が非常に不安定な状態でした。一方では左翼がさわぎ、満洲事変が起こっていましたからね。しかも満洲事変を起こした張本人の島本大隊長というのが、一高に配属された配属将校なんです。張作霖を殺すということを始めた人が、ぼくらの配属将校です。そういう時代でしたから、ぼくは何していいかわからなくて……。あとで金山と話したけど、ぼくも君みたいに外交官か何かになって南米の果てかどこかへ行って詩でも書いてたらよかったですかな、なんていったことがあるんです。みんな法科へ行きませしたけれどぼくは行きませんでした。でも文科っていつでもどこも行きようがないのが教育学へ入りましたが、これはつまらない

いですね。それで亀戸の川のこっち側にある、賀川豊彦の作ったセツルメント、そこへ行ってたんです。そこに寝泊りしちゃったんです。

浅野 ほう、私もあそこへはいっぺん行ったことがあります、ある要件で。

周郷 セツルメントの川向うというのには、もと亀戸の私娼窟みたいところでした。こっちは貧乏な人がいっぱいいますね、あの時期は共産党員の巣窟みたいになって、武田麟太郎なんていう作家が、関鑑子という人もぼくが行く前に住んでいたりました。一度、寝てましたらあそこに大

平警察署というのがありまして、寝込みを襲って全部連れてっちゃったことがあります。ぼくだけ残って誰もないんです。あそこでぼくは、風邪ひいて、それがもとで肺炎から肋膜炎になって、大学の一年半それで終っちゃいました。あとの一年半で卒業しないと、ぼくお金ないですからね。

それであわてて東大の前ではプリントなんか売ってますから、それを買ったりして……。その最後のころに、十三のころと違って、二十二、三のころ、十二月の寒い晩、渋谷のあたりを歩いてたら、きれいな讚美歌の音がきこえるので寒い夜風の中を惹かれて訪ねて行った、そこが浅野先生のところへ行った最初です。

#### 敗戦前後のこと

浅野 あなたは大学を卒業されて、まず文部省へ行かれたでしょう。

周郷 ええ、文部省へやっと入ったわけです、就職難でしたから。満洲事変になって多少よくなりましたが、一般的に失業時代です。

浅野 あなたは文部省に入られてから、もうだんだん教会から遠くなっちゃってね(笑)。

周郷 先生のところのこっち側に小さな家  
があって、そこに男が三人で住んでたわ  
け。内藤正隆君と竹本宗定君と三人。朝に  
なると朝ご飯を先生の家へ行って一緒に食  
べました。ところがぼくは文部省へ入っ  
て、初めて洋服っていうものを作ったの、  
そしたら泥棒が入って洋服とられちゃった  
んです。そして、もう仕方ないから先生の  
洋服着て……先生の洋服長いんですよ、そ  
れ着て文部省へ行ったりしました(笑)。  
ここで懺悔(告白)したい気持ちがある……  
けど結婚とか時勢とかの落し穴——がそれ  
は重いのでそれとして、敗戦後の焼跡のあ  
る教会に入って、正面の黒々とした十字架  
を見ていて涙があとからあとから湧いてひ  
とりで泣いた。心の根は先生の教え子で  
す。

文部省へ入ったのは、昭和八年夏ごろで  
すから日本はますます軍国主義になってま  
した。そしてぼくが入ったのが学生部、あ

とで思想局になるわけです、それが。昭和  
十二年が中国の蘆溝橋事件です。この間中  
国へ行ったものだからそこへ行こうと思  
って行けませんでしたが、マルコ・ポーロ  
ブリッジっていうんですね。

浅野 最近中国へ行ったらしたんですか？  
周郷 ええ、この夏、やっと。むこうが招  
待してくれました。

そういうことで教会に行かなくなりましたね。そして文部省に五年はいました。  
十二年の支那事変のちょっと前に東大の助  
手になりました。十六年には真珠湾攻撃が  
あって、十七年に蠟山正道先生、東畑精一  
先生なんかで「比島(フィリピン)調査  
委員会」というのができて、助手になる人  
が必要だということで、その委員会の補助  
委員ということで向こうへ連れて行かれま  
した。  
浅野 あ、フィリピンへ行かれたので  
すか。

周郷 その時に先生から電報をいただいた  
のを覚えています。『イチロヘイアンライ  
ノル』という電報。そして向うで病気にな  
っちゃったんです。それで日本へ帰って来  
たんですがあちこち逃げて回って一か月か  
かって帰ってきました。アメリカの潜水艦  
がいるもんですから、船の中も暗くして、  
一か月かかりました、輸送船でしたが。

でも一年ちよっとるすにただけで、今  
も覚えてますが、ほんのわずかの期間に日  
本人の「気持ち」が非常に変わってしまし  
た。昭和十八年、戦争末期です。ずっと日  
本にいたらこの変化はわからなかったでし  
ょうけれど……全然日本は変わったと思  
いました。そして帰って来たら、食べ物  
ないし、空襲ばかりで、いつ死んでもい  
い、死を覚悟したわけでもないのに死んで  
も仕方がないという気持ちでした。  
浅野 お茶大に入られたのは、その後何年  
ですか？

周郷 お茶大は、戦争に負けてから昭和十二年に新制大学に変わりますね。それ以前に、東京という所は焼野原になって、仕事もないし食べ物もないというので、今共同印刷の社長になっている人に絵本の編集をやってくれなんて頼まれて、したりしました。

浅野 いやあ、私はそのころちょうど軍隊にいましてね。

周郷 先生は、戦地には行かれないで、千葉、あ、柏ですね。

浅野 その時、さつまいもとはこんなにもまいものかと、初めてわかりました。

周郷 さつまいも、おいしかったですね。

浅野 それまで食わずぎらいだったんですけれどね。

周郷 昭和二十二年、大学は新制大学になるので、教育学というのを連合軍の司令部の方で重視したわけです。ところが人がいないわけです。九州大学からも北海道大学

からも履歴書送れなんていつてきて、どう

したらいいかわからないでいたら、亡くなった石川謙という先生がどうしてもお茶大に來いといましてね。ぼくも世の中どう

変わるかわからないからお茶大にしようということにしたんです。でもあのころ大学

っていつても、冬は寒いし暖房どころじゃないですからね。学生だって今と全然違います。冬は炭を買ってきてフーフ火を起

こしたりして、授業やってたんだか何だかわからないようでした。それで進駐軍の日

本人再教育という仕事、ぼくがたまたま英語ができると思われて、そんなこともしました。

浅野 お茶の水はあなた、何年ぐらい？

随分長いでしょ。

周郷 だから、昭和二十三年から四年前（四十八年）までやってたんです。

浅野 一度、私はあなたのお招きか、ほかの方か、よく覚えてませんがお茶の水へう

かがいましたね。

周郷 先生のお話を学生に聞かせたいと思

って来ていただきましたけれど……、一九五〇年代の終り、だと思えますね。

浅野 そのころ私はまだ教育大学の……周郷 そう、教育大学の講師でいらして、先生とてもお元気で、あの正門をさっささと歩いて入ってこられたのを覚えています。

### 最近の教育はさっぱりわからない

浅野 私ども、最近の教育を、新聞やテレビで表題ぐらい見るんですが、さっぱりわからないですがね。どういふ点が根本的に

われわれの時代と違ってますか、根本、です。

周郷 今、先生がいい出された問題——その根本のところか、一番「主要な問題」なんです……。

主要な問題、日本ばかりでなく現代の、世界中で最も重要な問題が、日本では、二の次に扱われているか、いい加減に扱われているか、だと思えます。経済大国というところの二の次とか、重要さを誰も考えないでジャーナリストティックに扱うとか、教育学とか教育、というせまーい世界に問題をもつてきちゃって、そこでいじくりまわしている、というのが今の状態だと思います。

浅野 実はね、この夏、松本に「長野県教育センター」がありまして、そこへよばれ、そこで向こうの注文中で『ヨブ記』の話をしてきました。ところがね、もう一人は、「ギリシャ哲学」の話、これもクリスチャンですが、もう一人は例のユダヤ教のマルチン・ブーバーの話、以上がおもな講演だったのですが……、こういうことは今まででなかったことだそうです。毎夏講習会をやるんだけど、いつでも教育技術とか、教育の組織、制度という問題が多く

て、宗教とか哲学とかそういうのは今年初めてだと、いつてました。

周郷 長野県なんかは、昔教育県だったいわれましたね。夏季大学なんていうのをやった、名譽も過去にはしょってわけてあげて。そういう ambition (名譽心) もあるわけです。それがちゃんとしたものかどうかはわからないけれど、それだからやったのだと思いますね。

先生がいい出されたことは、ぼく本当に賛成なんです。教育っていうのは、非常に何かこう、コップの中の嵐というか、ある狭い限られた世界の中の技術的な操作とか、アメリカ占領後、アメリカじゃこういうことがはやってるといふそんな瑣末なことに左右されたり、ある意味で貧血症みたいなになっていると思います。根が全部切れた飾り物みたいな状態なんで、やっぱり宗教的な先生の『ヨブ記』の話とかマルチン・ブーバーの話とかギリシャ哲学の話とか、

そういうようなものを聞いて、「狭くなつて、弾力性がなくてひからびちゃった教育」を、どういふふうに生き返らせようか、という気持ちはわかりますね。しかし、普通はそういうことを考えることすら怠けちゃっています。学校ばかりふえて、幼稚園もそうです。しかし何をやってるのか、ぼくわからないんです、本当のところ。

むかし(旧制)の小学校、中学校で習ったことはもっと簡単なことで、その簡単なことが今でも役に立つ

浅野 われわれ、いやあなたは私より若いから記憶していらっしゃると思うが、われわれの時代は旧制の小学校、中学校(私は高等学校へ行きませんか)小学校中学校でならったことは、もっと簡単なことでしたよな。

周郷 そう、ここが今先生がいい出されたことだけれど、最も重大なことなんです。

浅野　そしてその簡単なことが、今でも役に立っているんですね。

周郷　そう、そうですね。これは重大なことなんでね、小学校をいたずらに複雑にして、意味もない、あれもこれも教えて、テストに受かりなさいというやり方が、幼稚園の下の方まで影響していますね。

浅野　あ、そうですね。

周郷　下の方は、もっとわかりやすい、単純なことよかったですと思うんですがね。教育はそういうふうに、ただひろがって、幼稚園の数もふえましたけれど、もっとも教育の機能を果していないんじゃないでしょうか。

浅野　私も、関心がないことはないの、読んだり聞いたりするんだけど、わからないんですよ、こまかすぎて。よくあれが子どもたちにわかるもんだなあ、と思っています(笑)。

周郷　そうですね、ぼくもわかりません。ぼく

自身も一九五〇年代から六〇年にかけて、教育というものを考えるには人間とか、人生とか、進化論とか、生物学とか、それから歴史、社会科学とか、「教育という現象がおこっている世界」を「ひろげてみて」、今自分たちがどういう位置にいるのか、ということをやらなければいけないと思いました。

浅野　これは、日本とヨーロッパ、アメリカを比較した場合、違ってはいますか、違っていませんか？

周郷　ある点で、世界中の教育も、人間の生き方そのものが、都市化されたり科学技術が進んだりして世界中共通した問題をもっています。しかし、日本の場合、転進というか、占領軍に対する対応の仕方が、かたよった仕方をしましたから、日本の教育はもともと異常で無意味なものじゃないかと思っています。

子どもも「カッコいい」というのが好き

ですね。「かっこう(外見、はやり、外装)」ばかり考えて中身はますます貧乏——なくなってしまうわけです、ところがイギリスでもフランスでも中身——根本のところを考えています。世界のほかの国と違っていい点は、その点です。

日本の外装だけの教育とは全く違う

中国

周郷　隣の中国へこの夏初めて行ったんですけれど、全く驚きました。日本と全く違います。

浅野　それはやっぱり、私も非常な違いを感じました。私がある時感じたのは、中国の教育が、表面的観察かもしれないんですが、非常に画一的でした。

周郷　いや、それは先生が行かれたところは文化大革命のずっと前でしょ？　そしてまだそのころは、ソ連がいた(六〇年代に入るまえ)わけですから。そして六〇年代の



末にソ連が全部引きあげて状態が変わるわけです。画一なんです、大躍進がうまくいかなくて困っていた時代です。

ここでその問題が出てきたので考えてみたいのですが、「画一」ということでは日本の方がひどいですよ。

浅野 現在？

周郷 いや、ずっと。いかにも、民主主義なんていってるけど画一でしょ？ これ。

文部省が全部決めますから。

今度の中国行きは、最初上海から南の長沙、桂林へ行って北京へ帰ってきました。

方々でいろいろな人がいろいろな所を見せてくれて、知識としては知ってましたが、

「民主集中性」という、「民主」と「集中」とは両立できませんね。八億人以上いるところで、全部北京が命令するわけにはいきません。だから省の自治でやりなさい、というわけで長沙なんかでも、教育は教科書もやり方も、実験中だというんです。中央に

よって決められた教科書はないんです。そして小学校の上級からは実際上労働も入るし、工場も農場もあるんです。しかしそういう方法は全部その地方で考えるわけです。基本原理は、北京で共産党大会やなかで決めるんですけれどね。

浅野 また、そうしなきゃ、「少数民族」

というのがありますね。あの学校、少数民族学院、行きましたよ。画的にやろうたつてできませんものね。

周郷 そうです、文字や何か考えたつて。

イギリス人(シユラムという人)いま現代中国研究所の所長で中国の内戦時代のことを書いた人がいます。蒋介石が負けて人民軍が入ってきた時、どうしたらいいだろうつてその土地の人が人民軍に教育のことを相談に行つたら、その問題は自分たちで考えなさい、といったと言うわけです。ところが日本はそうじゃないんです。まだ何もできないころから、教育だけ

命令したんです。アメリカ占領軍の初期の意図にも反して「上からの教育」に迎合しつづけた。

浅野 どうしてそういう点において、文部省というものが、現在オールマイティなんですか？

周郷 ここが、日本の政治というものの、

独特な性質じゃないでしょうか。

浅野 そうですかね。

周郷 経済がそうでしょうか？ 農村のこと

もこのごろは多少考えてきましたけれど、大企業と直接に結びついている自民党政です。経済が中央集権ですね。アメリカ人が驚いてましたけれど、文部省が自民党からじかに指令を受けてるつていうんです。教育も中央集権です。そして日本の国民性もそうでしょうか？ 自分で考えることをしません、考えるほど「器量がない」のか、何でも文部省がいったつていうと口実がたつんです。教科書会社もまたこれにつ

商売します。やたらに文部省の悪口をいって仕方がないし、教師がだめじゃ悪くいったってその資格はないのです。けど、現実には文部省がすっかり作っちゃって、このわくにはまっていれば必ず俸給が出るという制度です。だから教えるのと教えないのというわけです。

浅野 どうしたらいいんですか(笑)。

周郷 これは本当に、最も心配すべきことですよ。

授業から「はずれた余計なこと」それが役に立った

浅野 私がつ通っていた中学、今の日比谷高校ですが、実にいやな中学ですね。一番いやだったのは、一学期ごとに成績順の序列があつて札のかけ替えをやるんです。

周郷 あ、成績で？　むかしの一高もそうなんです。

浅野 そうですか、あれはいやだったな

あ。右の方にあればいいんだが、左の方にあるんだから……。それでも呑気でしたかね(笑)。

周郷 そうそう、しかしふしぎなことに、左の方にあつても誰も卑屈になりませんでしたね。ほこりをもっていました。

浅野 ほこりはもてなかつたけれど(笑)。そして、先生にそれぞれ特色がありました。この間なくなった亀井高孝という歴史の先生、あの人なんかには随分いじめられましたけれどね。そのことから思うと、少し悪い意味において今の学校の先生は、生徒を大事にしすぎるんじゃないですか？

周郷 大事にしすぎる、そう、ぼくが大学にいたころ大学紛争がありましたね。その紛争中だって大学の教授は、昔の先生のようには叱れないんです。なんかこう、生徒の機嫌をとる方に回ります。大学の教授もずるくなった感じがしました。幼稚園でも小学校でも、親もそうです。表面は機嫌

をとっているけれども、成績や試験の点数なんかでいじめてるんですね。心理がたいへん複雑になったんですね。昔は、もっと単純な先生で、ちゃんとお叱られました。

浅野 私はそのころ、学校の授業がおもしろくない、殊に私は数学、理科が弱いものですからね。内外の小説や文学など読まなくてもいい本を読んだり……。そして父兄会、今は父母会、PTAっていうんですか、母からよくお前の父兄会に出るのはいやだよ、一通り終るとほかのお母さんはみんな帰ってしまい、私だけ残されて、あなたの息子は頭はそんなに悪くないが余計なことばかりやってるって小言をいわれるのが辛いところばされました。しかしその時読んだ書物が後に役に立ったといつてはおかしいけれど、それがなければ私は今のよう

に牧師をやっていますよ(笑)。  
周郷 その話、いい話ですね。この間なくなられた内藤濯先生は多くの先生なんです

けれど、ぼくの成績をよく覚えてるんです。そしてぼくはまあ上の方なんですけれど一番じゃないんです。それで内藤先生は、あんまり上なんてのはだめだよ、勉強ばかりしてるからっていわれました。一度一番になると落ちるといやだからほかの勉強しないで、ただ勉強ばかりするんでこりゃだめなんです。なくなつた和辻哲郎先生なんて大学で、東大のクラスで一番ビリでした。助手をしていたとき、そのころの成績表を見たのです。

こんなことをやったら日本は亡びます

浅野 それと連関して、私今の子どもが可哀想だと思うのは、遊ぶ時間が充分ないでしょう？ 遊ばせなきゃだめですよ。私のおくには千葉県の九十九里浜でしょ、今みたいに水泳を指導するなんてことはありませんから、目茶目茶に泳ぐんです。そこにど

ぶみみたいな川があってそこで泳いだり、浜へ行って、波が高くて危険でしたけれど、でたらめに泳ぐんです。

周郷 ジャーナリストティックにも今の子どもは遊ばないというのはおもしろいテーマなもんだから、いろいろ調べたりいつたりしてるんですけどね。今の子どもは小さい時から保護されすぎますから、テレビとか、よく食べさせられちゃいますね。それからもうひとつ、高度経済成長で人口移動がひどくて団地というものができます。そうするとその地方にあまり関係ない生活をして穴の中（マイホーム）に入っちゃう、かかわれるわけです。そういうふうな生活が変わって、テレビから食べ物から、子ども用のものができてむしろ「飼いなされる」かたちになった。素朴な物は今ないんです。

浅野 それに、このごろはお母さんも外へ出て働いていらっしやる。でも子どもが外

から帰って、「お母さん！」というの当り前のことじゃないですか？ しかし、冗談じゃなしにこんなことをやったら日本はほろびますね。

周郷 ぼくはもう、実質的には（やっとも）もっている（現象の奥では）日本の子どもと若者、一大人の方もあやしんですけれど、育って行くジェネレーションというのが、ほかのどんな国にくらべても、生きて行く力がないと思います。このごろ、子どもの自殺が多いっていうのは、生きる力が弱いということです。簡単に死ぬます。ちょっと何かのきっかけがあれば死ぬようになっちゃったんです。

浅野 そりゃ私だってね、さつき申し上げたように、中学校でいじめられてばかりいましたから、こんなことなら死んだ方がいいと思つたこともありましたよ。

周郷 でも死なないでしょ？ 昔は。浅野 死にませんよ。

周郷 「育ち方」が違ふんです。ぼくは前から考えてましたけれど、簡単に自殺ができるという状態は、簡単に他殺もできる状態なんです、いらいらして。いままでになかった犯罪が増大している。

浅野 そうその通りです。

周郷 だから犯罪がふえてくると、自殺がふえてくるのは確実なことだと思ひます。

浅野 その点で私は、教会で初めて生きて行くというか、そういう意味を学びました。昨年今ごろなくなった森有正君のお父さんに。

周郷 浅野先生の、若いころの先生ですね、森明さん、森有礼の息子さんですね。

浅野 教会で初めて、本当に先生らしい先生、それから友だちを得ました。

周郷 ぼくもそういうふうには十三の時に洗礼を受けて、あとでまた浅野先生の家に、二年ぐらいいました。朝お祈りしてから

ご飯を食べたりしましたね。その時の長男が猷一君、新潟大学の心臓の方の大先生です。小さくてあばれん坊でした。しかしあのあばれん坊があれだけの先生になったので、勉強だけしてたのだったら、もっと違ふと思います。

そういうことがあるもんだから、ぼくはどうしてもせまい教育学者は仲間であつても気が合わないですね。

神さまは人間を画一的にはつくらなかつた

浅野 それから、家には五人子どもがおりましたね。すると何にもいわなくても勉強する子と、やかましくいつたつて勉強しない子と、系統が二つあるんです。時々ふし

ぎに思うんだけど、子どもは皆持つて生れた天性というものがあるんだし、全然ほつたらかしじゃいけないかもしれないけれど、やかましくいつたつてためな場合もある

るし、何もいわなくたつて勉強をする子もいるから、もう少し、われわれからいへば神さまから与えられた性格とか能力とかいうものを自由に生かすようにしないとね。可哀想だと思ふんだ。

周郷 ぼく自身のことを考えても、ぼくの兄弟っていうのは、勉強なんかしたのはいないんです。ぼくだけどうしてこんなになつちやつたのかなつて、それはちつともいひとは思つてませんけれどもどうなつちやつたわけです。いろいろな人を考えると、全然ほかの兄弟と違つてその人だけが何かをやるんです。ほかの兄弟にはその人のやるようなことが全然現われな……何かあるんですね。

浅野 ありますよ。神さまは人間を画一的にはお造りにならないんだから(笑)。教育だつて画一的にしたら悪いのではありませんか。

周郷 いけないんですよ。神を冒瀆する、

ものだな、この画一的に押しつけている教育は。効果は逆になっちゃうわけです。ぼくはよく二宮尊徳のことを考えるんですけど、あれはだれも勉強しろなんていわなかったからしたくなったわけでしょ？(笑)親が世話したら、ああいう二宮金次郎にならなかったと思うな。だから、今の日本の社会は、それぞれ違ったものをもって生れてきた子どもを、画一的な強制によって、いのちをつぶしてる感じがします。

浅野 そうそう。さっきのあなたの生い立ちのことをうかがってもね、誰もあなたが勉強したって家庭じゃ喜ぶ人もなかったでしょう(笑)。

周郷 喜んでいないどころか……ぼくは变电所に四年半くらいいましたけれど、その間ぼくは自炊ですから、お金使いたらないでしょう。そして家はお金がないもんですから、うまいこといって「博に持たしとくとよくないから」ってみんな持っていって

やうんです。だから全然お金ないんですけども勉強っていうのは、十五歳ごろから一人でやると面白いものですね、あれ、強制されるから面白くないんです。

浅野 今、私の教会に、ある家庭で毎月開かれるドストエフスキーを読む会というのがありましてね。遠いものですからなかなか行かれないんですけどこの間初めて行きましたところ、『白痴』、あれが終りかけていました。私は中学四、五年のころ、わけもわからず読んだものです。その時はまだ日本語が出てなかったんです。それでエプリマンス・ライブラリーというのがありまして、とにかく読んだんですよね。

周郷 はあ、それはやっぱり、もう違いますね。

浅野 何も覚えちゃいけません。覚えちゃいないけど、とにかく読んだという……  
周郷 じかに、オリジナルのものにぶつかる勇気っていうの、今はないですね。

浅野 『クロイツェル・ソナタ』もね。あれは一ツ橋の時かな。私はどっかといえどトルストイの方がわかるような気がしたんです。『クロイツェル・ソナタ』も英文からですが、半分ぐらい訳しましたよ。英語の勉強にもなるかと思って。

そういう馬鹿なことを今の学生はするだろうかどうかと思つて……。またしようと思つたつて余裕がないですよ。

人間が人間になる余地(遊び場)がない——少しもかわいくないパンダちゃんばかり

周郷 だけと本当はぼくは、十代から二十代の始めっていうのはね、作ればいくらでも余裕のある年代だと、思いますね。金にならなかつた方がいいんですもの。ちゃんと、余裕つてものを作れる時代なんです。浅野 だから、もっと子どもを遊ばせて、

子どもの自発的な意志を重んじ、あまりさしやわりのないかぎり、それを自由にさせたい方がいいんじゃないですかね。

余計なことをいうようだけど、一中の卒業生で本当にスケールの大きい人間は、出ていませんよね。谷崎潤一郎ぐらいなものでしたでしょう(笑)。

周郷 もとは、一中だけの問題ですけれど、今は、日本中、国をあげて、面白くない人物を作るためのことをやってる感じですね。"教育"っていうんですか、これ。教育と逆のもんじゃないかな。

ただ今先生がおっしゃったように、小さい時から自発的に遊ぶことができるというところが、必要ですね。遊びにはいろいろ危険もともないますけれど……。そういう場所がない。場所がないばかりでなくて、なにか、飼いなされた動物みたいになっちゃってるんです。

浅野 そうそう、そうそう。

周郷 だから、外へ出ると不安になる。だから中にいるんです。

浅野 じゃ、パンダちゃんになっちゃ(笑)。

周郷 パンダなら、かわいいですよ。パンダほどのかわいさはない。

昔は、道路っていうのは遊び場でしたね。体がそう丈夫でない子でも、石で書くのがあって(ろう石)、道路の真中へすわって何か書いたりして……。道路っていうのは子どもにとってはいい場所ですよ？ 先はどこへ行ってるか、子どもの生命そのものと同じで、ずーっと先へ行くと何かあるかという夢ももてる。そして、ちょっと危険になったら家へ帰れる。いい場所ですよ。ところが道路はもう自動車に占領されちゃいました。そして、小さな変な公園なんかで、ここの中へ入りなさいって。あれは牢屋ですよ。

浅野 それで私、いつでも考えるんですけ

れど、小学校なんかの、幼稚園もそうですけど、庭が殆んど全部コンクリートでしょ？ コンクリートの部分もいければ、大半を土にして、なせもつと木をたくさん植えないんだらうと、不思議に思いますね。

周郷 ぼくだってそう思います。全部コンクリートにしちゃって、その中で遊ばないというんで、限定されちゃうんです。ひとたび外へ連れて出ると、遊べないの。

これ、聞いた話ですけれどね。フランスか何かのカトリックの神父さんが、日本の中学生を山へ連れて行ったんです。それで、"今日は何をしてもいいから自由に遊ばなさい"といったら、何していいかわからないんですって。二人ぐらいがちょっと、そばの川へ入ってみただけでまた冷たいから立ってるだけ。何もできないんですよ。と、いうふうに変わっちゃったんで

す。「かこの鳥？」

浅野 でも、今は私のおる渋谷なんかでも危いですものね。

周郷 で、結局は追いつめられて、テレビを見ちゃうんです。

浅野 あ、私はね、テレビっていうお話で、今の日本のテレビは何とかしなきゃいけないんじゃないでしょうか。

周郷 本当にいきませんよ、あれは。

浅野 あなたもご存知の西村一家が一年ばかりストラスブルグに行っていましたね。

テレビをフランスでは子どもには見せない。ですから今でも自分の家はテレビを持ってないんです。私の家になると夢中になって見えています。

周郷 日本へ帰ってくると、そういうふうになっちゃうんですよ。むこうはみんなが子どもには見せないんですから。

周郷 この間、日高六郎さんに聞いたんですけれど、パリにしばらくいましたけれ

ど、子どもにジュースとか、ココ・コーラなんか絶対飲ませないそうです。

子どもなりのイマジネーション（想像力）と考える力をつぶしてしまっている

浅野 そしてテレビを見ますよね、場面がどんどん変わって行くでしょ？ テレビを見ながら物を考える、なんてことはあり得ませんね。子どもだって目先の物についていくというだけで、子どもなりに考えるということができません。

周郷 そう、子どもっていうのは、大人よりももっと哲学的なことも考えられるわけでしょ？ そのチャンスを全部奪っちゃうんです。まわりが変わって行く、その刺激で生きているっていう感じですよ。大人が想像するよりもっと本質的な意味で哲学的なことを考えている人間なのに。

浅野 とにかくイマジネーションがね、子

どもには、

周郷 精彩があつて、大人にはかなわないような、それを子どもは自慢しないからわからないけれど、実質では考えてるわけです。そういう機会を全部奪っちゃうんです。テレビ、教育、それから子ども目あての出版物と子ども目あての食品会社ね。もつと思いついていえば、幼稚園というのも、これをこわしてるわけです。子どもの創造力を、そのまま生き生きとするように育てているんじゃないかってね、幼稚園の都合でコントロールするわけです。

浅野 私はもう、NHKに行くたびに文句いうんです。相手はハイハイっていいですよけれど（笑い）どれだけ本気で聞いてくれるのか解りません。

周郷 大体、子どもにサービスするという産業が多すぎますね。テレビもそうですし……。玩具もそうですよ？ そしていい玩具は一つもないんです。「子ども」という

ものを囮おとりにして、金もうけをしてる人が多過ぎますね。

浅野 われわれの時代は、殊に田舎でしたから、玩具のようなものは自分で作りましたよ。

周郷 そう、ぼくもそうでした。

浅野 たとえば竹馬なんかも自分で作りました。

周郷 竹馬でも、作ればね、自分で作ろうとして一生懸命自分でやるんですから……。一つの物を作るためには、いろいろな知識も必要だし……。

浅野 竹を切りに、竹藪へ行く。そこから始まりますよね。

周郷 どういう竹がいいか、選ぶところから、物を見る目」というのが訓練されて育っていくわけです。そういうことが全然なくて、「全部与えられちゃう」のね。

中国の子どもはそういう玩具なんか、ほとんどありません。夕方なんか、お父さん

の自転車のうしろに乗ってずーっとどこかへ行く、これが楽しそうなんですよ。一緒に親子で夕涼みをしたがら歩いて行くと、清潔な感じがしました。そしてみんな親の手助けをしています。子ども相手の店もありませんかね。

### 宗教的なものが不可欠——中国の共産主義は一つの人民の宗教

周郷 ぼくはティール・ド・シャルダンのこと前から中国へ行きたいと思っていました。しかしその後中国が、文化大革命後なお、子どもたちの育ち方や何かどう든変わって来ていると思います。行って、見たからわかるというものでもないし、今までもイギリス人の書いたものや、いろいろ、読んではいましたが、毛沢東の生れた家というのへ行つた時、直感的に、「イエスキさまのような人だ」と思いました。だから、ソ連の共産主義と、中国の共産主義は

違うんだなと思いました。帰ってきて、前に読んだ本をまた読んでみますよ。そうだなということがわかります。これはドゴールの片腕のような、文部大臣もやったようなアラン・ペールフィットという人の本です。(アラン・ペールフィット『中国が目覚めるとき世界は震撼する』白水社刊) 中国の共産主義は、非常に宗教的なんです。むしろ宗教的というより道徳的、倫理的なんです。

浅野 人間と結びついたような道徳的ですね。

周郷 そういう意味でいえば、宮本顕治の日本共産党と折合いのつかないのは、当然です。

この本によると、毛沢東っていう人は、いろいろな目にあつてゐるんですが、家族全部が犠牲になるわけです。自分の子どもも朝鮮戦争で死にますしね。自分だけが、捕虜になつたりしながらも、ともかく八十三



歳まで生きるんです。彼自身が絶対無私の精神、人民に服務するという精神で一生を

貫いています。毛沢東だけが貧民の出身です。周恩来でもなんでも、ちょっと身分のある家なんです。毛沢東という人は「大地の子」だと、ペールフィットはいっています。そして、まだ若いうちから中国の軍閥と外国の勢力と地主のもとで悲惨な状態になっている中国をどう救うかということ、共産党になる前から考えていたんです。毛沢東にとっては、女性と、圧迫されている農民が神なんです。この神の声をきいて生きようと思った、という感じがするんです。また「人民は神であって、毛沢東はその予言者である」と書いてあります。ぼくはこれ、わかる気がします。「中国共産主義は一つの人民の宗教」ここがソ連と違うところです。スターリンのことも書いてあります。「中国の人民が毛沢東をしてこれに信仰することで生きかえると感

じたようには、ソ連の人民はスターリンに対して感じていない」ということも。

「一九三五年、第二の長征のモーゼである毛沢東は神意を告知するものであって、すなわち司祭である、そしてしもべであると同時に指導者でもある、彼は、神なる人民に仕え、神なる人民を良導する代願者の役を演じている」これ、フランス人が見ているんですけれど、ぼくが直感的に感じたこととどこかで合っているんです。これにくらべると、日本にはそういう人がいない。日本の神さまは、お金とGNPと学歴なのか。

浅野 とにかく毛沢東という人は、スケールのかい人ですね。(先生はペールフィットの本を買って読んでみたいといわれ、編集部から先生にとどけることにした) 周郷 失敗もしているところがまた魅力があります。

浅野 矛盾もずい分ありますけれど。



ここでちょうど三時になり、お二人のお話に熱中していた私たちに、浅野先生はさりげなく「私、少々つかれましたが、まだつづきますか」とニコニコしておっしゃいました。今年七十八歳におなりの先生はお顔の色つやもよく、見事な白いひげをのばしていらして、モンベの上下のようなお召物を召して、ちょっと高砂のおじいさんのような感じがいたしました。あとでうかがうと、椎間板ヘルニアで、長時間いすに腰かけていらっしやるとおいたみになるとか、大変申しわけないことをしたと、ただただ恐縮いたしました。でも先生はそのことをおっしゃりながらもにこやかで、周郷先生も全く教え子というか弟子というか、ほほえましいお二人のごようすでした。

(一九七七年一月一九日)

## 春の七草のこと



和田陽平

七草なつな

とうとのとりの

にほんの土地に

渡らぬさきに

ストロントン

正月七日の朝、まだ暗いうちに、桶の上の俎に載せた七草を、庖丁で叩いて噓す行事は、私の子どもの頃には、とうの昔に廃れていたが、七草粥だけは必ず作ることとなっていた。もともと七草粥とはいっても、細かく叩いた小松菜を入れただけの菜粥であったが、碗に盛っ

て、ばらりと塩を振った味は淡白で、鮮かな緑と、爽やかな菜の香りは好ましいものであった。

芹なつな、ごぎやうはこべら、ほとけのざ

すずな、すずしろ、これぞ七草

ごぎやうは今のハハコグサ、すずなは蕪、すずしろは大根だが、問題はほとけのざである。現在の唇形科——シソ科——のホトケノザは迎も食えたものではないので、おそらく菊科のタビラコであろうというのが、たしか牧野富太郎先生の説であった。

タビラコはタンポポに似ているが、一つの茎にいくつ

かの小さな黄色い花をつける。タンポポの葉はダンドリ  
オンの名の通り、ライオンの歯のように鋭く切れ込んで  
いるが、タビラコの方は、それより丸味を帯びている。  
早春の頃に、地べたに丸く広げた葉の形が、仏座に似て  
いるので、この名が付いたものだろうという。

ナズナは俗にいうペンペン草のこと。春先きに罌粟粒  
ほどの小さな白い花をつけるが、その穂先のほんの一、  
二種ほどを摘んで茹で、御ひたしか、胡麻あえにすれ  
ば、結構食べられる。摘む指触りの柔らかさに、つい長  
く摘み過ぎると、口のなかにごそごそと、爪楊枝のよう  
な硬い筋が残って始末に悪くなる。この頃は山菜ブーム  
で、野草を食うことが流行るが、そんなに旨いものが、  
やたらに生えている筈がない。山菜弁当などを無理に旨  
がっているのは気の毒である。

現在の草餅はヨモギを用いるが、昔はハハコグサを使  
ったものらしい。私はハハコグサの草餅を試みたことは  
ないが、辰巳浜子女史によれば、ハハコグサをさつと茹  
でて細かく刻み、白玉粉に捏ね合せ、丸めて茹で上げ、  
小豆餡をまぶすと美味だそうである。ヨモギ餅は春の香  
りがするが、これは果してどんなものであろうか。

春の七草は食べる草だが、私なりに見る七草を選んで  
みたい。

いつかと、まちし、花さきて、

日も、あたたかに、なりにけり。

とも、さそい、かご、さげて、

すみれ、つみ、れんげ、とり、

——明治三十四年、幼年唱歌より——

スマイレ、タンポポ、レンゲ草、それから噓せるような  
菜の花は春の盛りを飾る花であって早春の草ではない。

私は春も浅い頃の路ばたの雑草から七草を選びたい。

イヌフグリ。この名は種子のふくらみが、行儀正しく  
二つ並んだ実の形から来たものである。正しくはオオイ  
ヌフグリ。遠いベルシャの国あたりから渡来したこの  
草は、今では路傍到る所に生える雑草になっている。早  
春の風に揺られて群れ咲いている瑠璃色の小さな花は、摘  
みとれば未練気もなく、ばらりと散ってしまう。私は、  
この花が大好きだが、鉢に植えてもうまくいかない。矢  
張り路ばたや、畑のふちなどに、ぬくぬくと咲いている  
のがいいようである。

カタバミ。路ばたや、石垣のすき間の日当りに咲く、

カタバミの五弁の小さな黄色い花も、暖かい春の花である。花期はイヌフグリよりも遅い。葉の色にえび茶色と緑色の二種類がある。噛めば酸っぱい味がする。

ミミナグサ。耳菜という名は、細かいうぶ毛の生えた小さい葉の形が鼠の耳に似ているからという。彼岸前はまだ風も肌寒い季節に、芽生えた四枚の葉を、十字形に地べたにひろげた姿は、春の訪れを告げて可憐である。日数がたつて、目につかない程の小さい花が実になる頃は、そそけだつて見るかげもない。

ハハコグサ。花は黄色い粟粒を寄せたような目立たない花である。これもむしろ、白い綿毛におおわれた兎の耳のような葉を見るべきであろう。私の幼い頃、子ども達はこの草をワタグサと呼んでいた。

スズメノカタビラ。何処の路ばたにも生えている。僅か一、二寸の、この小さなイネ科の雑草は、真冬にも柔かい青い葉を茂らせており、春に先駆けて、うす緑の優しい穂を出す。年ごとに冬の寒さの身にこたえる此の頃の私には、とりわけ、この草の穂が待遠しい。

タネツケバナ。よく見れば齋花さいなさく垣根哉。齋さいなの花も

趣きがあるが、アブラナ科の雑草では、私はむしろタネツケバナをとりたいた。路地や田の畦などに生えて、米粒ほどの小さい白い花が、アブラナ科特有の穂になって咲く。葉は丸味を帯びた小葉を羽状につけた形で、草全体の姿は齋さいなよりも小さく、優しい。

露の花。露のとうは美味である。熱湯でゆがいてから、醬油で青味の残る程度に、さっと煮るのも旨いが、それよりも熱い味噌汁に、生のままを指でむしって振り込むのが最上である。だが、私は庭の露のとうの二つ三つは食べるのを我慢して花を咲かせることにしている。この薄いひわ色の花ほど、早春の暖かさを示すものは、ほかにないからである。

私の好みで七草を選んでみたが、その色は黄、白、緑、青で、赤い色がないのは淋しい。だが、ヤブケマンやレンゲソウは春も開ひらけた頃の花である。透きとおるような緋色の草木瓜をあげたいが、これは木であつて草ではない。

## ひとりひとりの子どもを見つめて (最終回)

赤羽美代子

一年の後半を迎える頃、子どもたちは、お互いに「ことば」を媒介としながら遊びを發展させていく事は、少なくともあったようです。お互いの人間関係が成立してきたのでしょう。相手の心を聴き「ことば」の背後にある感情を聴きながら、互いに心の中の訴えを吐き出しているようです。(おとなは、相手の「ことば」の音を聞く傾向があるようです)

秋も晩秋を迎えたある日、子どもたちと、上野の、子ども動物園に行きました。教師はこの計画を立てた時から、動物と子ども結びつきに、中心を絞り、その事に心を奪われていたようです。一方、子どもたちは、動物との交流は二番目で、園内を走るモノレールに、すっかり心を奪われてしまいました。

その日、青空が美しく、モノレールの走る姿が青空に映えて、さながら、モノレール日和といった好天気でした。そのモノレールが秋の陽光を浴びて、姿を現わした時、子どもたちは、歓声を上げて歩をとめました。

「あつ、モノレール！」

「私、あれに乗った事がある」

「モノレールに乗ると、動物園がゼーんぶ、見えるんですよ？」

突然、よく通る力強い声の持ち主、五歳児U子の「先生！きょうモノレールに乗るんでしょう？」の質問に、三十八の瞳がキラッと輝き、私の顔を見据えます。

私は「そうね、モノレールに乗ると、帰りが遅くなるのよ」

と、自分に言い聞かせながら、曖昧な返事をしました。私もとっさの事なので、心の中では「子ども動物園とモノレールを組み合わせると、解散時間が十二時過ぎになるのでは？」

(其の日の解散時間は園庭十一時半) 「それともモノレールに乗せてしまい、余りの時間で動物との交流？」 「いやいや、それは計画外の事だし、事故があつては……と、ぐるぐると幾つかの事を思い巡らしました。

とにかく、今は予定通りにと、ぐっと気持ちを押さえて、全員、子ども動物園へ向かいました。その間、教師と子どもたちは、静かに、もくもくと歩きました。多分、子どもたちは、モノレールの事を思いながら……。私は、私で、これで良かったのかな？ と、心の葛藤をしながら……。

それから一時間程、子どもたちは、モノレールを忘れて、動物と交流しました。

やがて、子ども動物園とも別れを告げて、動物園の出口に向かうため、帰りの歩を進めている時、私の後ろ姿に、U子が強い語調で「先生！ モノレールには、いつ乗るの？」他の子どもたちも「モノレールに乗るんでしょう？」と抗議します。

私「きょうは、モノレールには乗らないわよ」

「えー、先生の嘘つき！ モノレールに乗るって言ったでしょう」

「いいえ、言わないわ」

「言いましたー！ こんなに、はっきりと「言いました」と、子どもたちに言われると、私は、先程、夢遊病者のようになって「帰りには、モノレールに乗りましょうね」と、口走ったのだろうかと帰りのバスの中で、ふと変な感じになりました。

翌日、四、五歳児、五、六名で「幼稚園ごっこ」遊びをしています。動物園に行った時の再現をしているのです。

「A先生、モノレールに乗りましょう」と、園児になった子どもが、A先生になつたらしい五歳児、Y子に言いました。

Y子「そうね。乗りたいわね。でも、どうしようかな？」と、考えます。

子ども「動物園より、モノレールに乗りたい！」

Y子、顔をちょっと困らせて「そうね、帰りが遅くなつて、お腹がすいても我慢するのよ」

子ども「うん、私、夜まで食べなくても、へーいき」とえぼる。

Y子「じゃー、急いで乗りましょう。そして乗ってから、

動物の所へ行きましょう」

「ハイ」と、全員積み木のモノレールに乗り込みました。どの子も、大変に満足そうです。

どうやら、あの日の私の内心の動揺を、Y子は幼稚園ごっこの中で、再現しています。子どもたちは、私の困った時の口調から、案内した時のトーン・ボイスから、考えながら歩く私の姿から、すべてを心で聴きとっていたのです。そして、子どもの期待が膨らんで、先生はきつと乗せてくれると思う自分の思いが反映して「先生は、乗せてあげると言いました」と表現したのではなかったかと、子どもたちの「ごっこ遊び」を通して、何か目が開かれたような思いがしました。

このような、教師と園児、おとなと子どもの食い違いは、毎日の保育の中で、大なり小なり何回もあります。教師が語った「ことば」は、味気ない「記号」にすぎなかったと、しみじみと反省をする毎日ですが、子どもたちは、その「記号」を、ちゃんと心で聴いて記号にすぎないと思われた「ことば」に意味を与え、意味を持たせて、自分の心と混ぜ合わせ、視野を大きく広げてくれます。(これは、幼児と教師の

信頼関係による事と思われませんが)

一年間の歩みを重ねて、幼児の成長を見る時、子どもたちは、相手の「ことば」を、どのように聴き、反応して、遊びを展開し、持続していくのかを、それぞれの遊びの中で繰り広げてくれます。

私たちおとなも、その事柄を聞き、形として整えて、解決するのでなく(形の表現は心より離れる事を強く感じました)耳を傾けて、心して聴き、その幼き者の魂の配慮に、全身を生かしてかわる時にこそ、生きた者が産まれると信じますし、又、そういう保育者でありたいと願い、祈らずにはいられません。

(霊南坂幼稚園)



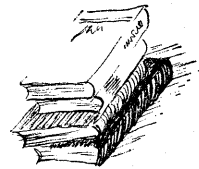
# ことばと幼児

## — 読書について —

副題に、「読書について」と書いておいたが、これは文字の読み書きのことではなくて、ドクショと読んで、本を読むことの意味である。幼児の場合には、これは絵本を読むことになる。

私は「ことばと幼児」の問題を、幼児・児童の読書という面から考えてみたいと思う。読書は、書きことばという言語（ラング）でつづられた文章を読むことであり、そのためには一定の言語発達が基礎になくはないけないので、そのことをここで問題にしようと思ったからである。

村石昭三



先日、六百名ほどの児童（六年生）の作文能力と、読書好きかテレビ好きかの関係をみたところ、読書好きの子は圧倒的に作文能力が高く、テレビ好きの子は全体的に作文能力が低いという結果が出てきて、読書の大事さをつくづくと感じさせられたが、いったい、いつごろから、また何故に読書の好き嫌いが出てくるのだろうか。

もっとも、このような言語能力と子ども好みの関係は幼児段階でみると、小学生にくらべてあまりきれいな結果が出てこない。幼児にテレビが好きかと聞けば好きと言うし、



絵本が好きかと聞けばそれも好きと言う子がいる。そのように幼児の興味は未分化というか、包括的というか、どちらかに偏ってしまふことが少ない。

それに幼児期は現象的（見かけ）には子ども自身の興味という内在的条件よりも、外在的条件、たとえば親の年齢（特に母親）の方がきいて、親が高年齢の方がその子のことばの理解力が高いという結果なども私たちの調査から出ている。

しかし、年齢がきくとみるのは全くの外在的なことで、もっと、子どもに対するしつけのスタイルがきいてみるとまた方がよいのかもしれないが、ともかく、読書の好き嫌いでいえることは、その偏りはずっと低い年齢からの、それもずっと長い発達経過の産物ではないかと思われるのである。

では、いつごろから読書の好き嫌いが出てくるのか。私の考えでは、小学校も六年生になって急に生じるのではなくて、一つの山は小学校の三、四年生ごろに現われる。子どもは学校の図書館から、何冊も本を借りてきては読む。毎日、借りて来ては読む。そして「ママ、小公子の本読んだことある？」と聞いて、「ママ、これ読みなよ、面白から」と言ってくれたりするものであるが、読書嫌いはいこういうことが全くないのである。

小学校三・四年生の時期は、子どもの言語生活が大きく変わる時であるという点で知られている。たとえば文章を読む速さを調べると、三・四年生の時期を境に、急激にその速度が早まり、また、速さに個人差が強くあらわれてくるし、作文などでは、長さの進歩が一時的に停滞して、だから文章から脱け出る現象が現われておもしろい。

## 二

では、何故に三、四年生で読書熱が高まるのか。それは、この年齢で、一人読みが出てきて、筋が読みとれる上に、内容のおもしろさまで読みとれる「読み方」ができるためである。書きことばを手だてにして想像の世界を創造し、そこで遊ぶことができるのだから、おもしろくてこたえられぬにちがいない。

読書好きになれない子は、その原因の一つに、読書好きの子のような「読み方」ができないことがある。文字は読めても、書きことばを手だてにして、筋が読みとれない。いや、筋は読みとれても、内容のおもしろさまでは読みとれないのだから、おのずと読むのがおっくうになって、読書ぎらいになって、テレビに移っていく。まことに情ない話であるが……

。さて、こういう「読み方」の基礎ができあがるのは小学校低学年である。

それでは「読み方」の基礎とは何だろう。それは一般に漢字が読めないためだろうかと考えがちだし、それ故に、小学校低学年の国語の勉強というと、ひらがな・片かな・漢字の読み書きというように文字学習が主に見られがちであるが、

本当のところは書きことばという言語（ラング＝言語活動の基礎にあることば）が子どもに意識され、特にシンタックスを中心に学習され、その表現が書き方（作文）であり、その理解が読み方ということになるのである。すなわち、ラングの意識化という言語発達が基礎になり、また前提になって、それが「一人読み」という読書ができるようにさせてくれるのであって、文字の読み・書きというのは、その中の、そのための記号変換（音↓文字）にすぎないのである。

さらに、そのラングが意識される最初はいつかといえ、それは四歳期以後にあらわれる話しことばの意識化という、このときからはじまる。それまでは、たとえば友だちのしゃべることばに幼児音があると、「○○ちゃん、赤ちゃんみたい」と注意を向けはするが、自分のことばづかひまでは気づかない。それが四歳になってくると、だんだんと自分のこと

ばづかひにも注意を向けるようになる。それ故、ここからことばのしくみを気づかせる「ことば遊び」の学習が行なわれるようになるし、その指導はことばの発達を約束させることになる。

### 三

ところで、読書好きと読書嫌い、これを決定的にする、もう一つの原因は、お話のおもしろさを知っているか、いなかということである。話のおもしろさを知らされているか、知らされていないかということであって、このハシリは実は「幼児期」、もっと具体的にいえば、四歳期である。

四歳期を「イメージ年齢」と私は呼ぶ。話を聞きながら、ことばにすがってイメージを創り、イメージを広げられる年齢だから、ここでお話の楽しさを知るし、母親や教師からお話を口から耳へと語りつがれることによって、話のおもしろさを知らされるのである。

絵本なども母親や教師が口から耳へと語りつぐように読んでやらねばならぬのである。「今いそがしいから、一人で読んでいてね」などという、手間抜きばかりしては、子どもは話のおもしろさを語りつがれることはないだろうし、四

歳あたりで、お話をおもしろいと思わない子は、決定的に読書嫌いの小学生になるということを深刻に考える必要があるだろう。

「イメージ」というのは、なかなか語の定義がしにくいものの一つである。だいたい、外来語で日本語訳のできにくいものは内容に広がりがありすぎて的確に日本語で説明しにくいものであり、幼児教育の中でも、イメージを映像とみる限りでは「絵画的性」が強いけれども、自然の領域などでは、イメージを現象と現象の間をつなぐ論理・筋道にその根拠をおいて考えたりする。

さて、先に四歳期を「イメージ年齢」と呼んだのは、イメージが三歳期までのことばの発達を得ることによって、フィクションという想像の世界を創造することに注目するためである。この世にかなえられぬこともことばを聞いて想像できることは勿論のこと、自分が生まれぬ過去の世界、遠い、遠い未来のこともことばで想像することができるところに特徴がある。しかも、それは三歳期までの一定の言語発達（見聞き、経験したことが文に変換できること）ができたもののみが、話しことばでつづられた文章を耳で聞いて理解し、話のおもしろさまでに触れられるのでイメージがことばで広げら

れる。また、自分で話をつくったりもしてその世界に遊ぶことができるようになるのである。

過日、東北地区の幼児教育の大会が岩手県の花巻であった。「言語」の公開保育をみるのがあった。それは絵カードでお話づくりをすることば遊びである。お姫さまの絵カードが一枚。先生の誘いかけに一人の男の子が前に出てきての発表である。

お姫サマガ ベッドデ ネット、(聞)

朝、オキテ

オハヨウト、言イマシタ。

それは、ただどしい、気取ずかしさがさらにただどしさを重ねるようだったが、先生はそこで、「だれに、あいさつしたの？」とたずねたが、もうこの子には、ここまで言うのが精いっぱいだった。

と、その話を聞いていた子どもたちの中から、

王子サマジャナイノ？

という声がとんで、このお話づくりは進んでいった。子どもをつくる、王子さまとお姫さまの出会いのイメージに私たちははっとしたのだが、こういう、お話づくりの楽しさを知ったこの子らは、きっと大きくなったら、読書好きの小学生に

なるにちがいないと思つた。

今一つ、ことはとイメージの関係でいえば、物語のつくるイメージには情動的な性格が強いけれども、ことばの発達はイメージの中から、論理的な芽を育ててくれるようになる。

それは絵画・映像を一つの「面」として示すならば、ことばは「線」としての存在であり、その線が長くつなげられる形が叙述という表現であり、接続詞を使ってそれをつなげていくことを可能にするのが論理であるからだ。イメージはことばによって、多次元の世界につくられるが、それを正確に叙述し、正確にことばで人に伝えようとするときに論理的な面が強調されるようになる。

私たちは、今、幼児の概念形成と言語の役割について実験調査を進めているが、三歳の幼児に「お母さんは？」と聞くとき、「ハタライテルノ」と言い、また「タイヘンナン」とも答えてくれた。子のために一生懸命に働く母を見てのイメージなのだが、この子らがさらに母の生活を見、母を語るることによって、その「たいへんさ」の論理(わけ)をやがて知るときがくるにちがいない。

#### 四

幼児の、童話に寄せる心の大切さを知らされるのは浜田広介による幼児期の回想である。

小さい折、冬の夜は毎晩、いろりを囲んで母親から面白い話、かわいそうな話を聞かされたが、後年、童話を聞く楽しさを自分一人のよい経験として留めておかず、もっとたくさんの子らに語りつごうと思ひ立て、自分の聞いた話をもとに童話を編んだという。これが広介童話の起源である。

もっとも、この回想の中に、父親から文字の読み書きを教えてもらって、そのために人より早く小学生になって絵のよい童話・物語を読むようになったとある。この点だけみると、文字早教育論につながる話題になるが、本当のところは、幼児期に母親から聞かされたお話に寄せる心が下地になっていて、それが文字への興味を誘い、文字習得を早めさせたとみるべきであろう。

幼児期の子どもが絵本や童話を読み聞かせてもらって喜び、小学三・四年が一人読みして楽しめるように発達するのは、それぞれの段階で一定の言語発達が基になっていることは、四・五歳児の文字習得にも見ることが出来る。三・四歳までに一定の話しことばの発達ができて、ことばのしくみに気づくことが前提になる。そして店の看板や絵本に見かける

書かれたことば（書きことば）に対し、それが口で言われたことばが文字で書かれているという意味を知り、語られた一音が一字に対応し、しかも、その文字は他のどんな文字とも異なる形であることに気づくとき、子どもの文字に対する興味の出現となってくるのである。

その意味では、文字への興味は、狭義の文字指導の結果というよりも、もっと広く、言語指導とか、保育全般の発達指導の結果であることに注目する必要があるだろう。就学までにはほとんど文字を知らなければ、就学後の文字の勉強についていけないのではないかと危ぶむよりは、むしろ幼児期の、文字も知らぬほどの、言語指導が問われなければならぬし、幼児期の発達そのことが危ぶまれないならぬだろう。

幼児の発達は最初にふれたように、小学生にくらべて比較的外的条件がきいているような場合が多く、そのために、文字習得の場合でも、文字環境を整理してやれば文字を自然に覚えていくだろうと考えがちである。しかし、子ども自身の発達（内在する言語発達）に注目しなければ環境は形骸化してしまし、子ども自身の発達を約束するのが保育というものであろう。

言語環境の大事さは、例の狼少女のエピソードで語りつくされているが、この話は狼の環境に入れられた少女は狼らしくなったという適応現象に注目するよりも、むしろ潜在的に人間としてことばを使えるべく生まれてきた少女が、それを開花させてくれない環境に放置されたさだめ（運命）の不如意の方こそ問題にすべきことではあるまいか。

## 五

ことばの活動という現象の底には、その基礎になる、ことばの発達が先行するはずであり、それを正しく見きわめた指導をすることによって、私たちはことばで子どもの生長を約束してあげられるだろう。

読書についても、幼児期にお話のおもしろさを知った子、知らされた子が学校に上がって文字を知り、「読み方」を知って読書好きになる。おもしろさを知った子は少々勉強はきつからうと、漢字を覚えなくては本が読めなくなると恐れ、自分に言い聞かせるのだろう。そう思うにつけて私たちがこの幼児期から児童期への発達の輪廻（リンネ）ということに、ときにおそろしさを感じ、ときにその理（ことわり）の深さにうたれるのである。

（国立国語研究所）

「黒いノート」より



村田修子

色はあせてしまっているけれど、黒い皮のついた小さなノ  
ト。

ずっと、ずっと以前に大切なことを書いておいたのに、どこに  
しまい込んでしまったか分らなかったノート。

その迷子にしてしまっていたノート、それがあった。中には、  
きらきらと光る宝石のように貴重なものがつまっている。それは  
思ったまま大胆で率直で、そしてせん細な感覚を持った。不思議  
とささを感じられる、こどものことば。

青リンゴ

おりんご どうして青いの

おりんご びょうきなの

それで ねているの（もみ殻の中）  
そう、じゃ ねていなさい

蛾

蛾、蛾、ガラス窓にいるわ

しよい（白い）おようぶくで

あかい 飾りがついて

とつても すてき

パレー みたい

にがしたとんぼ

とんぼさん へんなとびかたね

お羽いたくして ごめんなさい

かえったら

お医者さんに いきなさいね

ほたるぐさ

ほたるぐさは青いから

とらないで見たましよ

かわいそうだからね

しびれ

足の裏で 小さい虫さんが  
たたくさん ちくちくって あるいてるの  
あっこ くすぐったくって 笑いそう

夜

そと みてごらん  
さみしいわよ

木があつて お月さまがあつて

風があるわよ、夜だから

おかあちやま

お鼻とお鼻とくつつけよう

おかあちやまのおめめ、一つになっちゃった

はなしまししょう

おめめ 二つになった

ああ、よかった

がけの上で

ここ、こわいわ

おっこちそうね

おっこちたら しんじやうわね

しぬといたいもんね

おかあちやま おっこちないでね

しま(な)ないでね

以上は何かにつけて口をついて出る幼児である妹のことばを、そのまま消してしまうことを惜しんだ小学校六年生の姉が書きとつておいて私に見せてくれたものです。

このことは私に二つのことを教えてくれました。

一つはいうまでもなく子どもの創造性の豊かき、不思議さ、神秘さ。それは本で読み、また子どもについて学んだことがそのままくりひろげられた感じです。

もう一つは、余り活発ではなく、どちらかというと引込思案で自分を表に出さないこの子について、経験の少なかつた私は、たしかに心配の目ばかり見つめていました。

これを見せてもらったことよって、人それぞれの中にひそむすばらしいもの、派手に表現することをしない人の中にも、それぞれのすばらしいものが息吹いているのだ、ということを考えるきっかけを与えられたことです。(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 私の保育

私が最初に出会った子ども達は、知恵の遅れた子ども達でした。それは、高校時代の宗教的使命感が、このような子ども達の目の前に、私をたたせたからです。

しばらく大学で、知恵の遅れた子ども達と過しているうちに、「知恵遅れの子とも達ばかりと接していると、子どもを見る目がかたわになるよ」と先輩から忠告され、それもある程と思い、近くの保育園へ出かけ、普通の子とも達とも接するようになりました。それから半年ばかり、知恵の遅れた子ども達と、普通？の子とも達と、並行して接していましたが、そのうち、何かわりきれないものを、段々と感



小林暉親

じるようになりました。

それは「何故、知恵の遅れた子ども達と、普通の子とも達と、分けて保育しなければいけないのか」という疑問なのです。どちらも天真爛漫で、とてもかわいいのです。皆、こちらが気持を豊かにして接すれば、豊かに応じてくれるのです。どの子どもにも、それぞれの個性があつて、楽しいのです。そこには理屈はありません。なのに、どうして、知恵遅れと普通児という風に分けて保育がされているのでしょうか。お互いの園の交流すらないのです。本当に別々に保育する事が子どもの為になるのでしょうか。



その辺の解決がつかないまま、施設実習の時期を迎え、実習生として、愛育研究所の家庭指導グループで、お世話になる事になりました。実習生という事で、知恵の遅れた子ども達の指導法でも教えて下さるのだろうと、期待を持って最初に津守先生にお会いしました。すると先生は一冊の本を出して、「これを読んできて下さい」と言われました。それは、K・H・リード著「幼稚園」（フレーベル館）という本でした。

私は、その知恵遅れの子どもとは一見、何の関係もなさそうな「幼稚園」の本を手に取り、仕方なく読み始めました。しかし、読み始めて驚いた事に、そこに最初に書かれている事は、知恵遅れの子どもの事でも、普通の子どもの事でもなく、私自身の事でした。つまり「大事なものはあなた（私）自身なのであって、あなた（私）自身がどんな人間で、どんな態度で子ども目の前に立とうとしているのか、それを見つめなおさない」という事でした。私がそれまで学んできた事は皆、知恵の遅れた子ども達の事についてであり、普通の子ども達の発達と保育課題についてでした。でも、そこには「問題は、保育者であるあなた自身なのであって、あなたがあなた自身について何を学んでは

るのか、という事である」と、鋭く指摘しているのです。

私がこれまで学んできた、正常な発達とは、異常な発達とは医学的にはどうだ等々は、確かに大事な事であり、現在、私が子ども達と接する上で、とても役に立っています。しかし、それらの知識は、知恵の遅れた子ども達と、普通の子ども達との区別の仕方を教えてはくれませんが、「同じ子どもなのだ」という事は、教えてくれませんでした。そこに、私の疑問があり、悩みがあったわけです。K・H・リードと津守先生が、「問題は、子どもではなく、あなたの気持なのですよ」と教えて下さったのです。私はそこで始めて、何故、多くの場所で、知恵の遅れた子ども達と、普通の子ども達と分けて保育されているのかに気がきました。つまり、問題は、子ども自身なのではなく、子どもをとりまわっている大人の側の問題なのだ、という事に。私は今でも、この本に出合った事と、この本を紹介し、実際に指導して下さった愛研の先生方に感謝しております。

そこから、私の子ども達に接する一つの考え方の基本が形作られてきました。それは、知恵の遅れがあるかないか

の問題は、子どもの側の問題だけではなく、私を含めて、子どもをとりまく大人の側の問題でもあり、その大人の側の問題にも、保育者が自分自身の事も含めて取り組まない限り、子どもの保育は完全には保障されないのだ。つまり、子どもを育てようとしている親や保育者が、どんなに子どもに遅れがあろうとも、その遅れを少しも問題にしなければ、その遅れは何の問題にもならないのであり、逆に、客観的に見ても、遅れがないにもかかわらず、親や保育者が、「この子は問題児なのだ」とすれば、そこに問題が存在してしまうのだ、という事です。

従って、子どもの成長の中で、子どもが育っているという事が、何の問題もなければ、その子どもはそれだけで健全に、かつ健康に育っているものであり、逆に、少しでも大人が問題を作りあげていけば、その子どもは不健全な、かつ不健康な状態におかれてしまうのです。そこで、真の保育者は、保育者の役割の一つとして、子どもをとりまいている問題を、必要以上に問題視している大人がいるならば、その大人を含めて保育する事が、子ども達を健全に、かつ健康に育てる事になるのではないだろうか、と考えるべきではないでしょうか。

今私は、市立による「親子教室」の指導員をしております。この親子教室は、〇歳から学齢までの、何らかの障害があると思われる子ども達とその親が、通ってきております。ここでは仮に、その子どもに何らの障害がないとしても、もし親の気持のうちに「うちの子どもは障害児ではないかしら」という悩みの心があるならば、「通ってきたら如何ですか」と勧めています。

無論、普通児集団の保母さんや先生方の中で、担当している子どもについて問題をかかえた場合、親子教室へ送ってくる事もあります。つまり、親子教室へ通う規準は、親と保育者にあるわけです。そして親や保育者が、この親子教室へ親子で通う（通わせる）事によって、親自身の気持が整理され、又保育者も、他の子ども達と分け隔てなく、その子どもを気持の上で受け入れる事ができるようになったら、もういつでも親子教室を卒業してもいい、という状態になるわけです。ですから早い親子は、数か月で卒園という事もありうるわけです。

今、親子教室では、一日中皆そろって笑いこけていま

す。職員と父兄とがいつも冗談を言い合ったり、からかったりして楽しんでおります。初めは、そんな雰囲気仲間々溶け込めなかつた親達も、いつのまにか今では一番よく笑うようになったりしています。それは子どもの遅れ等の問題が解決した為ではありません。ただお母さん方の気持の中で、自分の子どもをあるがままに受け入れられるようになったお母さん程よく笑い、まだまだ躰が気になり、近所の子どもが気になり、将来が気になるお母さん程、無口で大人しい人として存在しています。でも段々と、そのようなお母さんも、笑いの中に引き込まれていくようです。

そんな中で、子ども達はどうなのかといいますと、初めのうちは、この子は親を認知しているのかしら、と思う程のお子さんでも、この頃、親達があまり楽しそうにしているせいか親を大分意識して、親から離れなくなり、おんぶやだっこをせがむ子がとても増えてきました。そのような子ども達に対し、初めの頃、お母さん方は、子ども達が赤ん坊になるみたいで、躰ができないのでは、と心配していました。この頃は、内心嬉しいのか、自分の子ども達が甘えてくると楽しそうに、おんぶやだっこをしてくれるようになってきました。

そして何より感心するのは、お母さん方の子どもに対するつきあい方が上手になり、遊びでも、親子で楽しそうに遊べるようになってきた事です。今まではスカートで登園し、親子が別々に保育室の中にいるようだったのが、最近では、お母さんもズボンなどの動きやすい服装をしてきて、保育室の中で親子一緒に遊ぶ光景が増えてきたのです。つい二、三か月前までは、子どもと一緒に居ても、遊んでいても、障害の事、躰が思うようにできない事、将来の事等が気になって、まるで他人同志が隣にいるみたいでしたが、最近では、子どもと一緒に楽しく笑い合うようになったのです。そこには、保育者が入り込む余地のない程、親子の心の触れ合いがあるのです。そしてこんな光景、こんな親子が少しずつ増えてきたのです。

ここまでくると保育者（私）の仕事はあと少しです。それは全員がこのようなお母さんになってもらう事と、こうして親の問題から解き離れた子ども達を同じ仲間として受け入れてくれる、より適切な集団をみつめて、そこに送ってあげる事です。

これが私の保育であり、役割だと思っております。

（八千代市立親子教室）

# オーストラリア・ニュージーランドの 幼児教育



津 守 真

オーストラリアとニュージーランドというと、遙か遠くの国のような気がしていた。距離からいえば、遠いことはたしかであるけれども、夜、飛行機で発てば、九時間半乗って、翌朝にはオーストラリアのシドニーに着く。オーストラリアから日本を見ると、海を隔てて隣国である。オーストラリアもニュージーランドも、アジア諸国の仲間であって、欧米諸国よりも近い関係である。これは、行ってみて実感として得た認識であった。

去る八月に、私ははじめてオーストラリアとニュージーランドに行く機会を得たのであるが、幼児教育の分野でも、行く前に考えていた以上のことを経験した。旅をするときには、いつでも、考えてもいなかったことが経験できるので、それが楽しみなのであるが、今回は、幼児教育の分野の中の新たな発見があったので、そのことについて記したい。

私自身が見ることができた幼稚園が六園あり、グループの他の人たちがいったところを合わせると、十五園にのぼるので、オーストラリアとニュージーランドの幼児教育の全貌を見ることできたといつてよいのではないかと思う。どこの幼稚園も小規模なので、いちどきに大勢の見学者が入らない

ように、四、五名乃至十名位に分散して見学できるように、それぞれの市の教育委員会当局で配慮されていたので、どこもゆっくりと見学することができた。また、どこも、子どもも遊んでいる傍に自由にいれてもらい、子どもも極めて自然に遊んでいて、気持のよい見学をすることができた。次に、全体を通じての印象と感想をとりまとめ記したい。

まず第一に、どの幼稚園も小規模で、子どもたちは大たい一日中（といっても、午前または午後の半日であるが）ゆっくりと遊んでおり、先生も落着いてゆったりと動いていたことである。最近何度かアメリカの幼稚園を見て、小グループのコーナーを自由に使ったものでありながら、その内容にはかなりいろいろのプログラムがせり合っていたのと比べて、オーストラリア、ニュージーランドいずれも、かなり徹底して自由な遊びを重んじていることは印象的であり、見ていても、安心した落着いた気持であった。子どもたちは幼稚園に來たときから、自分で遊びを見つけて、ある子どもは積木を並べ、ある子どもはフィンガーペイントをやり、タイヤの池で水遊びをやり、戸外の運動具によじ登り、ままごとをする

など、ゆっくりと動いた。かならずしも単元のようなまとまりがあるとも思えず、ひとつひとつの遊びがたいせつにされているようであった。

この点、二十五年前に、私がアメリカの幼稚園で実習していた当時の米国の状態がこれに似ていたように思う。むしろそれよりもっと、あせりがなく、ゆっくりとした印象であった。これは、まだ都市も少なく、世界の文化の中心ともなっていない土地柄もあるのだろうか。私はシドニーの街を歩き、港の近くの美しい海と空の見えるダウンタウンを歩いてみたとき、米国の西海岸に似ていながら、人々の様子が何かに似たりしているように思った。アメリカのようなきびきびしたところがない。植民地の気安さともいうのだろうかと思ったりした。

幼稚園の室内は、低い戸棚などを用いていくつものコーナーに分れ、それぞれに、布や紙、手糸などの廃物材料、こわれた機械の部品、えのぐ材料、ねんど、木工その他の材料がおいてあること、庭には自然木を利用した遊具や小屋などが作られていることなど、今世紀前半に盛んだった新教育の原型を見たような気がして、思わず目をこすって、もう一度目を見開いて見たことも何度かあった。草原や林の多い土地で

あるので、庭が自然の緑に恵まれ、かなり広く、海を見下す芝生であったり、庭が立派なところが多かった。(写真1・2)

第二に、こうしたよく遊べる幼稚園を作り上げるのに、幼稚園の指導者たちの努力を各処に見ることができたことは、こういう全体にのんびりした土地において、印象的であった。どの土地にいても、子どもの遊びの教育を守るために、背筋をのばして、悠然と頑張っている婦人達の指導者の姿があった。シドニーの教育養成大学で案内をして下さったミス・ハリソン、その幼稚園の主任のミス・ニュートン、ニュージーランドのオークランドで六つの幼稚園にわれわれを依頼し案内する役をとって下さったその地域の幼稚園の指導主事のミセス・グランディッシュ、ロトルアで三つの幼稚園にわれわれを分送案内して下さった地域の指導主事、いずれも、忘れ難い風姿である。

オークランドで、午前中の幼稚園の見学を終えて、中華料理店で昼食をとったときのミセス・グランディッシュのはなし。ニュージーランドで、幼稚園の子どもが一日中遊ぶことを教育と考えるようになったのは、はじめからではない。二〇年程前には、もっと時間で区切られた、構造化した教育をしていた。キンダーガルテン・アソシエーションに、ミス・

クリスはか数名の熱心な指導者がいて、子どもの遊びのたいせつさを説き、次第にこうした教育が普及するようになったのである。行政面で何ら決定的な措置があったわけではない。行政当局も、自然にこういう保育がよいことだと考えるようになったのである。こういう話をするとき、物静かな落着いたミセス・グランディッシュの口調が熱っぽく多弁になるのを感じた。この人は、このような教育が軌道に乗ってから、幼稚園教育に従事するようになったとのことであった。詳しいことは、いまウェリントンにいるミス・クリスにきけばわかるとのことであった。これらの指導者たちは、会話の中で、*the whole child, the social, emotional and intellectual development* というような話をよく用いた。日本だと、社会的、情緒的、知的発達などというと、書物の上で学ぶ抽象的なことに考え易いが、この人たちは、それがすなわち、幼児の遊びの姿そのものであるというように考えていく、この両者は切り離せないもののように思えた。

幼稚園の現場には、母親たちがかならず手伝っていたが、その母親たちと話してみたときも、こうした幼稚園での自由な遊びが、子どもの発達にとって最善のものであることを、心から納得して、子どもの遊びを見ている様子であった。

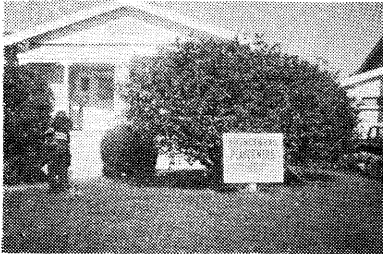
▼写真1 庭にある自然木の遊具



▼写真2 庭で木工をする子ども



▼写真3 マンガワウ・プレーセンター



ロトルアで、幼稚園訪問に出発まで少し時間があって、ホテルのロビーで指導主事と話をしていたとき、だれかが「それでは、幼稚園は小学校への準備をするのですね」といったら、直ちに、「ノー、小学校への準備ではなくて、ライフ（人生）への準備だ」と、自信に満ちて答えたことは、何かごとんと響いた感じであった。忘れることができない。

幼稚園の普及、発展にとって、キンダーガルテン・アソシエーションがこれまで指導的な役割を果たしてきたらしいことは、いろいろの機会に知ることができた。オーストラリアの

シドニー幼稚園教員養成大学の幼稚園で、そこで用いている机、椅子、教材などは、どこから買うのかという質問に対して、この大学自体、オーストラリア・プリスクール・アソシエーションと密接に関連していて、この大学で工夫考案したものを、プリスクール・アソシエーションの販売部で製作販売し、そこで作ったものをここで買うのであるということであった。帰る日に、そのプリスクール・アソシエーションの販売部にわれわれは立寄ったが、そこでこのアソシエーション及びオーストラリアの幼稚園の歴史を記したパンフレット

がないかとたずねたところ、残念ながらないという返事であった。「われわれは、そういう書物を作らねばならないのだが」といって、オーストラリアの幼稚園の設置規程のようなものを記したパンフレットを教えてくれた。一ドル一〇セントで買ってきた。(ニュージーランドのキンダーガルトン・アソシエーションとオーストラリア・プリスクール・アソシエーションとは別組織である)

第三に、幼児の保育施設に対する政府の援助の仕方である。とくに私に印象的だったのは、オークランドのマンガワウ・プレーセンターである。(写真3)普通の家を改造して作られたこの建物と土地は、政府が買って、地域の親達に運営を任せるといふ仕方だった。といっても、中心になる指導者格の母親がいて、数人以上の母親が保育者をつとめていた。子どもも母親とのびのびと愉快そうだった。ガレージは父親達により、子どもたちの木工場に改造されていた。この母親たちが、週一回の夜のクラスに参加して、一〇週間を一区切りに勉強できるようになっている。三段階あって、三〇週を終えると、プレーセンターのリーダーの資格がとれるのとこのことであった。私が話していた母親は、もうじき三〇週を終えてリーダーになれるといっていた。幼稚園が満員で入れ

ないので、プレーセンターのシステムができたといっていたが、こうしてやってみると、幼稚園でやっていることは、このプレー・センターでみたされるので、もう幼稚園にゆく必要は感じていないとこの母親はいつていた。この日の午後、オークランドのノースショー・ティーチャーズ・カレッジにいったとき、その先生の話では、プレーセンターが母親達の精神衛生に果している役割は甚大なものがあるといっていた。子どもの育て方をどうしてよいか分らない母親達が、ここで子どもとの遊び方を学んで、それによって精神の安定を得ている人は沢山いるとのことであった。そういえば、ここで甲斐がいく動いていた母親の何人かは、楽しそうに子どもにもふれていたが、その表情は幸福そうには見えなかった。

政府は、こういう家と土地を買って地域の親達に与えるが、その地域で必要がなくなったり、建物が老朽化したら、それを売って、また新たな土地に家を買ひ求めるのだそうである。親達の力を信用して援助をするという政府の考え方に私は感心した。そこで見学しているときにはごく当りまえに思えることが、日本にひき移して考えてみると、途方もなく大変なことに思えた。これはどうしてなのだろうか。

第四に、教員養成のことである。年限は短大であって、そ



の点は不十分であるが、音楽や芸術を通して、学生自身の人間性の向上を目標とするということで、一本の筋を通してすることは立派だと思った。当然、音楽教室や美術教室は数も多く、設備も整っていたし、学生が自分で調べて勉強できるライブラリーがととのっていることはうらやましく思った。子どもに教えるための知識や技術よりも、学生が自分自身の向上や、自分自身の趣味を伸ばすことが、子どもの教育の上になんかたいせつなことかとあらためて考えさせられた。これも簡単なことのようにでありながら、日本の大学でなしえないことである。

第五に、子どもの観察の逸話を二つ三つ。

《マンガワウ・プレーセンターで》一人の女の子が、かなり高いところに渡してある板を渡ろうとしていたが、一人ではわたれない。最初、私が出しても拒否したが、三回目くらいから、私の手につかまって渡り、はしまでくると、私が抱いて上からとびおりさせてやると大喜びする。もっとやってくれというように、私の方をみて、一〇回以上もくりかえす。そのうちに、片手だけ支えてやると一人でとびおりる。もう帰りの時間になって、家の方から呼び声がする。さっき私と話をしていた母親がよびにきたが、子どもがやっている

姿をみて、明らかにかなり急いでいるのに、数回やりつづけてからつれてゆく。私とふれていた短時間に、この子は、板を自分で渡れるようになったことはうれしかった。また、母親が呼びにきて、母親自身、明らかに、自分を制して、子どもにやり通させたことは、夜の講座を受けているだけのことがあると思った。

《ノースライド幼稚園で》大きなタイヤを半切にした池に水をいれて、青色の染粉を加えたところで、何人もの子どもが水をいれたり出したりしてあそぶ。先生が、じょうごや容器をもってくると、遊びは一層活発になる。女兒Xと男児Yが並んで水をやっているところに、別の男児Zがきて、YとXの容器に水をいれると、Xは、「わたしだけに入れてちょうだい。Yちゃんにいらてはいけない。私だけに。」という。それから、何かの拍子にXとYに水がひっかかった。すると、「あなたがやった」「You did」と何回もい合う。二人とも笑っている。こういうやりとりを楽しんでいる。ゆっくりといい合いを楽しむ風景で、こういうことが、いくらでも、あちこちで起っているのだらうと思った。これが、ゆっくりとできるところに、何でもないようなことながら、一日中遊べる幼稚園の大切な点があるのだと思った。

★海外文献紹介★

『遊びの世界』

by Donald Baker

*Childhood Education*

March 1977

『フリードリッヒ・

フレーベルとの出会い』

by Kristina Leeb-Lundberg

*Childhood Education*

April/May 1977

○「遊びの世界」

イギリスのウェイマウス教育大学の英語と演劇の教授であるドナルド・ベイカーという人は、幼児の遊びを比較文化的に考察することによって、遊びの根源的なとらえ方をしている。

彼は、西インドやマレーシア、西アフリカ、ヨーロッパ、アメリカなどの地域でみられる子どもの遊びを比較し、遊びは人間生

活の普遍的現象であるという。にもかかわらず、こうした異文化の中で、子ども達の遊びがどこで（場所）、いつ（時間）、だれと（人々）行われるかについて注目してみると、いくつかの違いが出てくることを強調している。

まず、どこで（場所）ということに関してだが、その中で最も大きな影響をもつ要因は、気候であるという。イギリスやアメリカでは家の中で過ごす時間が多いがマレーシアや西アフリカや西インド諸島では、子どものみならず、家族が外で生活する時間が多く、従って、子どもはいつも屋外の環境を十分試してみることができる。

その上、「熱帯での遊びの活動の多くは、単に遊びではなく現実なのである。アフリカの子どもが母親の家事を手伝っているのを見ると、遊びか仕事か決めがたい。いずれにしても、空想と現実の区別は、文化や気候がどうあれ子どもにとってはかすかたでみえにくい。西インドでは、子どもは魚つりにいって獲物も実際に料理し、食べる。つまり、遊びと仕事はこの場合ひとつに溶けあう」

彼らのおもちゃは、コナッツとかコヤス貝の貝殻とかの自然物ですが、これらは教育目的を考えてつくられる高価なおもちゃより、より想像的に使えるところつけ加えている。

このようにして、西欧の都市の子どもは、物理的な環境の制約を受けていること自体が情緒のフラストレーションや様々な学習問題をおこすものとなるという。だから、「遊びの中で子どもは自分の力を発見し、世界を広げていくのだが、不幸にも、彼の世界は広くなく、動物園の動物のように情緒のストレスが子どもにかかってくる」

この空間的な欠如を補充するために、都市化された西欧では、家庭やプレイグループやデイ・ケア・センター（保育所）で、人工的に遊びの場を提供しているわけである。

次に、いつ（時間）ということに関して考えてみると、熱帯では子どもは疲れたり、お腹がすくまで遊ぶのにくらべて、西欧では時間の観念にあまりにとりつかれすぎているという。「マーガレット・ミードは、西欧の子どもは、創造的、想像的な遊びに没頭することを奨励されているという仮定の下で、目的のない仕事をしている」といっている」

彼女の書によると、「サモアの子どもは、遊びを学習することによって働くことを学ぶのではなく、四、五歳の子どもの頃から、全体社会の構造の中ではつきりと意味のある仕事をしている」というのである。同じく「西アフリカや、マレーシアの子ど

もも、想像遊びをするのではなく、彼らは実際に生活の中で家事として行っている」

最後に、だれ（人々）と遊ぶかということを考えてみると、「近代生活の最も顕著な姿は、お互いに面とむかい合うということが少なくなったことである。テレビ・ラジオ・電話は生物の行動パターンをかえた」

今では、「お話でさえ、テープやテレビで語られ、実際に目の前の生きているおとなによるのではないのである」さらに、著者は、「子どもが触れ、味をみ、においをかぎ、見、聞くということとを文字通りやらせることによって、彼らを育て、不思議さや喜びを抱きつつこの世界とかかわらせる」ことの大切さを説き、「このことは、技術文明や概念形成や論理的思考を彼らに教えるよりもっと大切なことである」といっています。なぜなら、「私達は感じもしないことを表現することはできないのだから」

結論として、私達が子どもの遊びと呼んでいるところの子どもの活動は、時間や場所や人によって、日常生活の仕事から分離される必要はないと強調している。「ネビル・スカーフ = (Neville Sturt) がいうように、ユートピアとは、仕事遊びの場所であ

る。小さい子どもが永久に遊びたいというのは、時間や、場所や、仕事と遊びの区別がない宇宙のことをいっている」と結んでいる。

## ○「フリードリッヒ・フレーベルとの出会い」

アメリカの初等数学の指導主事が、幼児の数学プログラムについて研究するために、イギリスのライセスター (Leicester) というところにあるブリティッシュ・インファントスクールを訪れたことにより、フレーベルとの出会いをするという記事である。

著者は、その学校で行われていた幼児のすばらしい数学的作業に心を打たれ、幼児の教育における数学についての文献を調べることになる。

すると、何と四〇〇ページもあるキンダーガーデン・ハンドブックの中に、ほんの一、二ページしか数学について割かれていないことに驚き、古い時代にさかのぼって調べてみることになった。一九五〇年代も、一九四〇年代も前述のような結果しかみられず、一九三〇年代、一九二〇年代には、ほとんど数学に関するものはみられない。ところが、一九一〇年代に、恩物と作業 (Gifts and Occupations) といわれる言葉をみつけ、フレーベルとの出会

いが始まるのである。

最初は、マリア・クラウスとジョン・クラウスによって、一八八二年に紹介された図解の数学的教材に驚き、フレーベルの恩物というものを知るのである。著者は、「実際、幼稚園や小学校の数学におけるピアジェ・タイププログラムとして今日薦められている活動を思い浮べる程、非常に近代的な数学的見地から興味がある」と述べている。

さらに、フランク・ロイドライトが、彼の自叙伝の中で、彼自身いかにフレーベルの教材を楽しんだか、そして、この教材が子どもの数学的、創造的イマジネーションの非常によい訓練になると述べていることを引用している。

いよいよ、著者は、フレーベルの記念の地ブランケンブルグを訪れる。フレーベル博物館で著者は、自らの数学的な目を通して、フレーベルがいかに若い頃、数学に強い興味をもっていたことをかを見出す。(フレーベルの自伝―「教育の弁明」・岡元藤則訳、玉川大学出版部)によれば、彼は若い頃から幾何学、測量、鉱物学のみならず非常に幅広い学問を修得し、様々な形で実践を行っている。筆者記)

著者は、フレーベルの数学の本をみて、ベスタロッチの数学の教師であった、ジョセフ・シュミットに影響されているという。

シュミットという人は、子どもというのは、幾何学やいろいろな形に生まれつき興味をもっているものだといいことを、強調していた近代的な教師であった。

一八一一年、八月に、フレイベルが書いた未発表の日記の中で、彼は自分の子どもの頃を回想して、幼くして母を亡くしたので、自然を観ることが多く、それによって自らを慰めていたと書いているという。

著者は、フレイベルは、こういう経験をすることによって、後にシンメトリー(対称)というような近代的な概念の研究のための基礎を発見していたのであるという。

「フレイベルの幼児期の記憶から……ことばではいい表わせない程、驚きをもってチューリップを観察した……その規則性に心から喜んだ。六つの花卉、種の入ったカプセルは三つに分かれている。幾何学的な形や立体を発見した時のうれしさなど……」

フレイベルは、学校でも算数を得意とし、森林官になった時も、幾何学的な風景の測量に特に魅せられたという。その後、ベルリン大学では鉱物の研究をし、自然界における結晶の根源的な姿をみつけたり、彼のこの方面への興味は決して留まることがなかった。

フレイベルが、幼稚園をはじめまゝの一四年間、カイルハウ(Kellian)で教えた学校でも彼はこの幾何学のプログラムをとり入れた。

著者は数学者として、フレイベルの幼稚園での数学的プログラムは、単に静的な形とかフォームについてはかりでなく、それらがいかに動きの中で行動するかに関係しているといっている。さらに、幾何学的アイデアに関し、フレイベルはユークリッドを越しているともいう。なぜなら、「シンメトリーは、しばしば子どもの芸術的創作と関連して、非常に重要な課題となった」

まとめとして、フレイベルは、子どもにとつても、おとなにとつても非常に近代的な数学教師であったことを述べ、後に、恩物と作業が教室では、厳格でよくない学習となったのは、教師がフレイベル程、十分に数学と遊ぶ背景を持たなかったからだと結んでいる。

他の分野の専門家が新しい目でフレイベルをみつめ直してみたところに、この小論の興味深さがあり、フレイベルへの我々のより深い理解を求められているような気がします。

(十文字学園女子短期大学 江波淳子)

イギリスと日本

—その教育と経済—

森嶋通夫著

岩波新書

著者の森嶋氏は経済学者です。だからといってこの本は、経済情勢を分析・究明した型苦しいものではありません。ロンドン大学で教鞭をとり、教育者でもある氏は、この本を通じて、イギリスと日本両国内の教育と、教育が生み出す人々の経済活動、生活意識を見事に描き出しているのです。

その見事さは、氏が長らくイギリスの大学に籍をおいて、内側からイギリスの教育制度やその中身を知っていることからくるのでしょうが、私にはもう一つ、自然科学と異なり、正解のない問題を取

り扱う社会学者としての、人間の生き方への興味が息づいているからだと思います。

氏によるとイギリスでは、学生のもっているいろいろの資質を耕す、個人教育がなされていると言います。「学問とは方法を学ぶことであって、知識を集めることではない」との考え方に基つき、学生は高校から、自分の学びたい、少数の科目について、深く勉強します。そして大学でも、非常に多くの種類が用意された講義から授業を選択し、かつ個人授業を受け、個性的に育っていくというのです。

このように教育が成功すると、大学や大学院を卒業した優秀な人々は教育部門に留まります。それは何も教職の給料が高いからではありません。彼らはお金が儲からなくてもよいから、こんな楽しい世界に一生住んで、教育者となって、同

じような喜びを次の世代に与えたいと思ふようになるのだそうです。

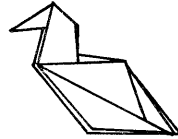
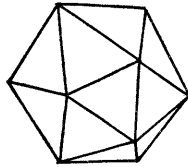
そうなるも学生達は産業界へはゆかないります。日本の教育の悪さ、画一的教育こそが、学生を産業界に送り出し、日本の経済繁栄を築いたと、氏は言います。イギリスの経済不調は、教育の良さが原因というようになりますが、ある程度、衣食住が足りたなら、人々はお金より文化的楽しみを選ぶというでしょう。

日本でのその先駆者として、氏は漱石をあげます。漱石にみる高等遊民、個人主義は、英国じこみというのです。漱石が日本の将来を憂えたその心配は、これからますます色濃くなっていくことでしょう。日本の経済発展が頭打ちの現在、この本から日本の五十年先、百年先を思いをめぐらしてはいかががでしょうか。

(皆川美恵子)

# 飛ぶ折り鶴

伏見満枝



恩師山形寛先生の晩年の著書「千羽鶴を折りましょう」を頂いた時、私はもう一冊だけ折紙の本を持っていました。折紙の神様に近い本多功先生の「日本のこころ伝統折紙」という本です。本棚にこの美しい大きな二冊の本を並べながら、老後になったら心静かに余生を楽しむものが出来たと胸をふくらませました。それが五年も経たない中に、折紙に明け暮れる日々が訪れて来ました。今も花や動物の折紙細工を遊ぶ時間的余裕は持てないけれど……。

伏見さんは、子どもに向けた科学の本「卵の実験」(福音館)の著者でもあります。その本には、卵を丸い方を下にそっと置き、手を静かにはなすと、卵は立つという、コロンプスもびっくりするような実験が収められています。

物理学者の御主人と、共同で仕事をなさる伏見さんは、やはり共同で、この飛ぶ折り鶴を『数学セミナー』(日本評論社)に発表されました。今回、幼稚園や家庭で手軽に、飛ぶ折り鶴を折れるよう、御執筆頂きました。さあ、皆さん、折紙を御用意下さい。

心ひそかに思うことは、伝統折紙を数学的に解明して基本体系を整理すること。国際的に共通な記号に統一する運動に共鳴すること。また手工芸と科学の接点をつきとめたい——これは目の悪い方の数学教育に役立つかも知れない。数学ぎらいな子も楽しみながら勉強するかも知れない——手先の器用な子は頭の中もシャープに発達して行くだろう等とけなげにも考えます。

実際には自分自身が下り坂をゆっくり行きたい為の頭の訓練をしていると言ひ聞かせています。

我が家の主は理論物理学者で、工業国日本の将来のエネルギー源不足を心配している一人ですが、趣味として、麻の葉、かごめ、千鳥等、和洋を問わず模様や織物の研究をしています。

四十年近く相棒をつとめる私が秘かに願うことは、自然の法則に従えば、本職と趣味はどこかで仲よく手を結び、彼の永年の願望である原子力の平和利用の為に必要な核融合の未解決の部分の理論の糸口をさがし当てることも有り得るかも知れないということです。

そのようなことから伝統折紙の風船正六面体から連想して、折紙で正四面体を作り出すことを思いつき、その正四面体を平面上で回転させて紋様の数学的解明に役立てました。それから引き続き、正多面体に興味を持ち出して、正六角形から正八面体、正二

十面体という大きな風船を折り上げることに成功しました。私共はその正二十面体を美しく折りたたんで出来た可愛い鳥に「雷鳥」という名前をつけて、折紙の世界に新しく送り出すことが出来ました。(カット参照)

近頃は新聞の中に驚くほど沢山の広告の紙が折り込まれていますが、その中から好ましい紙を使ってあれこれ折紙をしている時に、凡ての雑念を離れて、澄んだ頭の中から物事の真理を的確につかみ取る知恵が生れて来るかも知れないと夢のようなことを思うことがあります。

彼が本職に関連した仕事が忙しくなると、趣味の方の研究も思索の途中で邪魔が入り、突然思考が中断されることもある。研究生活は思考の積み重ねであるから夢中になれば寝食を忘れるほど時間がほしい。勿論本職についても論外ではない。このようにして私共は、理論家と実験屋というそれぞれの立場の面白さを味わいながら同じ趣味を持つことになりました。

さて今日の課題である飛ぶ折り鶴の場合を考えましょう。伝統折鶴の背中の中心は紙の中心と一致する。これは子どもでも知っている。飛ぶ鶴は首や背の部分を重くする。これは紙ヒコキと同じ原理です。一枚の紙で折った時に、沢山の紙の重量が前方の



图 1

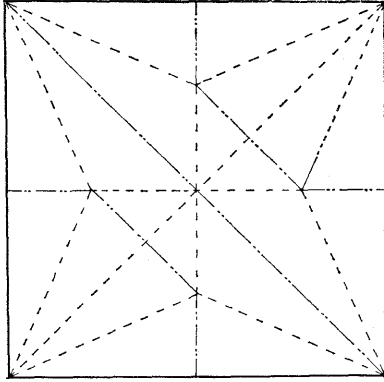
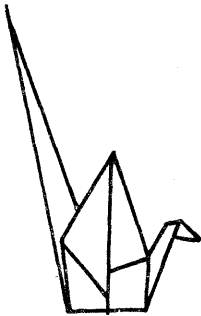
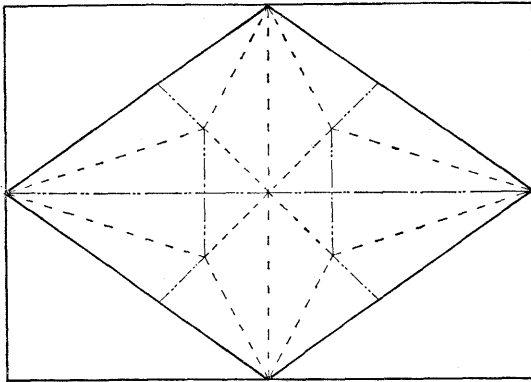


图 2



部分に入れば、自然の成行きとして鶴の背中を中心は対角線上を後方に移って行くことになる。この中心点をどこに決めれば伝統折鶴の方法に従って飛ぶ鶴を折ることが出来るか。実際に折ってみると、面白く飛ぶ鶴は中心点が少しずれても折ることが出来るが、翼の部分に何回も折り直す折り目が出来て案外すっきりしません。

現代創作折紙作家のタコ形の紙から折られた鶴（この場合は尾と首の長さの違うものが出来る）をみると、その点が不明確です。首の根元に厚味が残っているので、芸術品として、置き物として見ればよいが、折紙が国際的に発展して行けばいずれは見逃せない問題点となるのでこれを理解してみたい。

折紙を規則正しく平面に折りたたんで行き、最後に立体にする過程は、日本の着物と同じ発想で、日本本来の文化です。私共は完成した姿の中に不思議にも真、善、美が自然に備わっていることを感じます。だから私達も伝統的な日本のところを次の世代の人達に伝えて行きたいと思えます。

伝統折鶴は幼児教育の教材として普遍的存在ですからくわしい説明ははぶきます。

今、正方形と菱形で折った鶴の展開図を比べてみます。前者（図1）は前後左右の区別がなく、後者（図2）は対角線の長さ

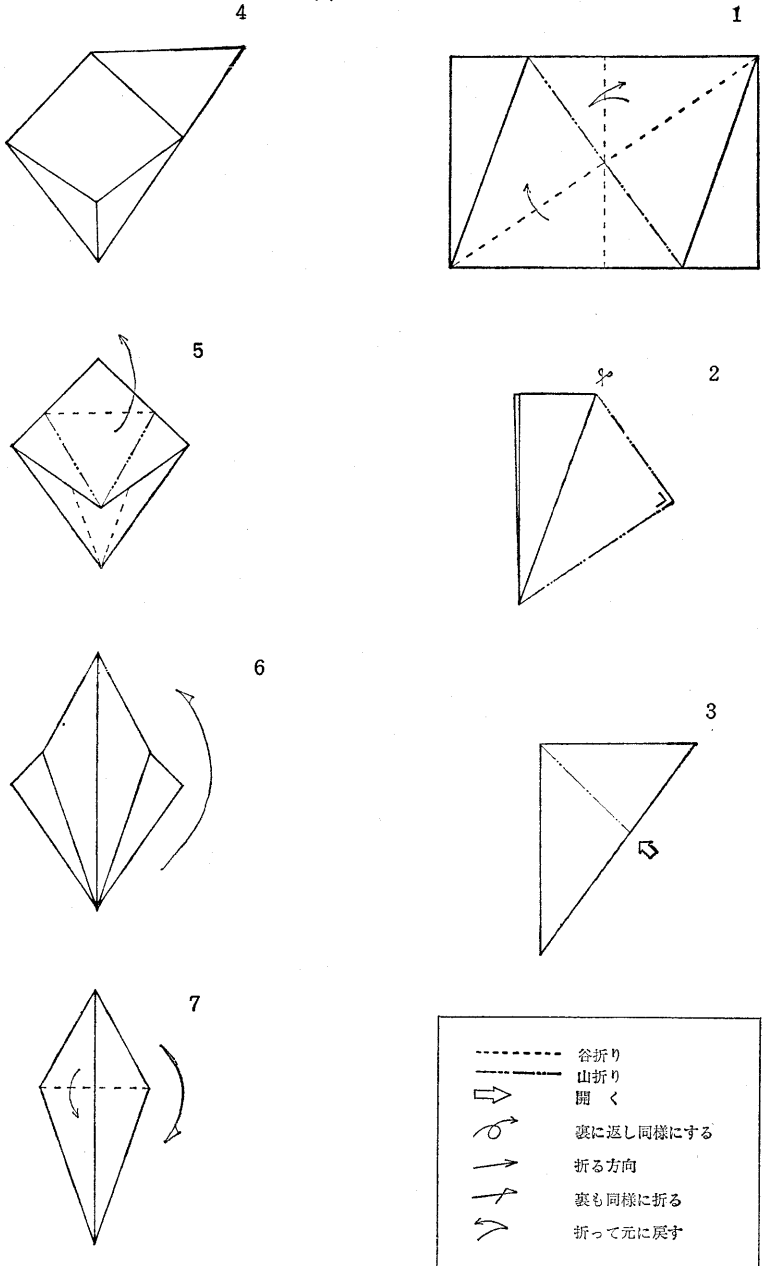
が違うので、首や尾の長い鶴が出来たり、翼の大きい鶴が出来たりする。例えば薄いタイプライター用紙で折った白い大きな翼は、清楚で優雅な美しい鶴に変化するでしょう。折紙は実際に自分で折って手に記憶させた方がよいので、読者も身近にある紙を使って、是非折って下さい。

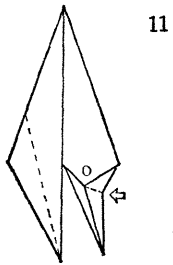
### はばたく鶴

伝統折鶴は頭部を中割りに曲げることによって、首と尾の区別をしました。はばたく鶴は頭と首は従来通りにしますが、尾の折り方が変わります。尾の部分図3・10・11のように、直角不等辺三角形のそれぞれの角を二等分してその交点即ち内心を決め、この点を中心に外側に二つ折り中割りして、そのまま後方に折り上げます。（12、13）背中には空気を吹き込まないし、また吹き込まない状態になります。

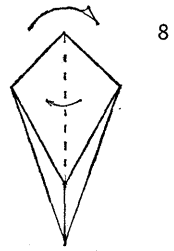
翼の根元を軽く折り、両翼を左右に少し引張り背中の部分をゆるくする。左手で首の下部を持ち、右手で尾を後方に吊上げる。紙の破れない程度に強く引くと、翼は動きはじめ、自分の呼吸に合わせて、鶴らしくゆう然とはばたく練習をする。ここまでは準

図 3

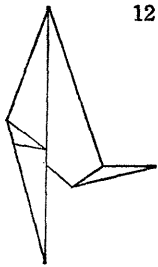




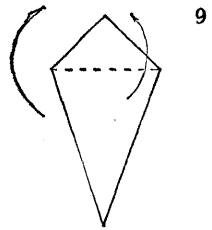
11



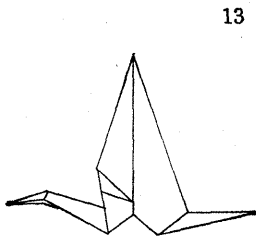
8



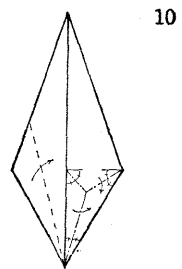
12



9



13



10

はばたく鶴

備段階なので人前でしない方が賢明です。静かな置物であった鶴がはばたくのですから、頭上に魔法をかけて、みんなの注意を引いて、そして静かにはばたけば子ども大人も喜ぶこと請け合います。

### (KM式仕上げ法)

私共がこれから折る鶴の仕上げ法が、飛ぶ鶴の基本形となるので、KM式仕上げ法として説明をしておきます。

(1) はばたく鶴のように尾の折り方を変えようと、翼の幅が広くなったことに気付きませぬ。

(2) 鳥が飛べば着陸の姿も考えなければなりません。真直ぐに飛び、また美しく滑走する為には本物の鶴のように頭から口先にかけて平らにします。首の部分は従前通り中割り折りですが、頭部は中割りにしないで、頭部を折り曲げてからそのまま前方に平らに伸ばします。

(3) 伝統折鶴の背中の四角の部分は三角形に広げます。中指以下を翼の下に、人差指を首の上に、親指を背の上に乗せて、背と翼の前縁を左右に、やや後方に引張り、背中を三角に広げます。

それから親指で背と翼の接線を三角形になるようにおさえて整え

ます。背中の中央は背骨になるようにタテ三角に残し摘みます。横姿を見ると、少し動的になって来ましたが、これでは飛べません。もっと前部を重く、後退翼になるように考えなければ駄目です。

### 飛ぶ折り鶴

さていよいよ飛ぶ折り鶴を折ってみましょう。図4 AC、Bを折って元に戻し、AをB上にのせ折り目をつけ元に戻します。ADも同じく、B上にのせ折り目をつけて元に戻します。そのようにして折り目をつけた交点で、図のようにAをAC上に合わせて折りませぬ。

次に、前につけた折目を重ねて折り、B上に端をそろえます。

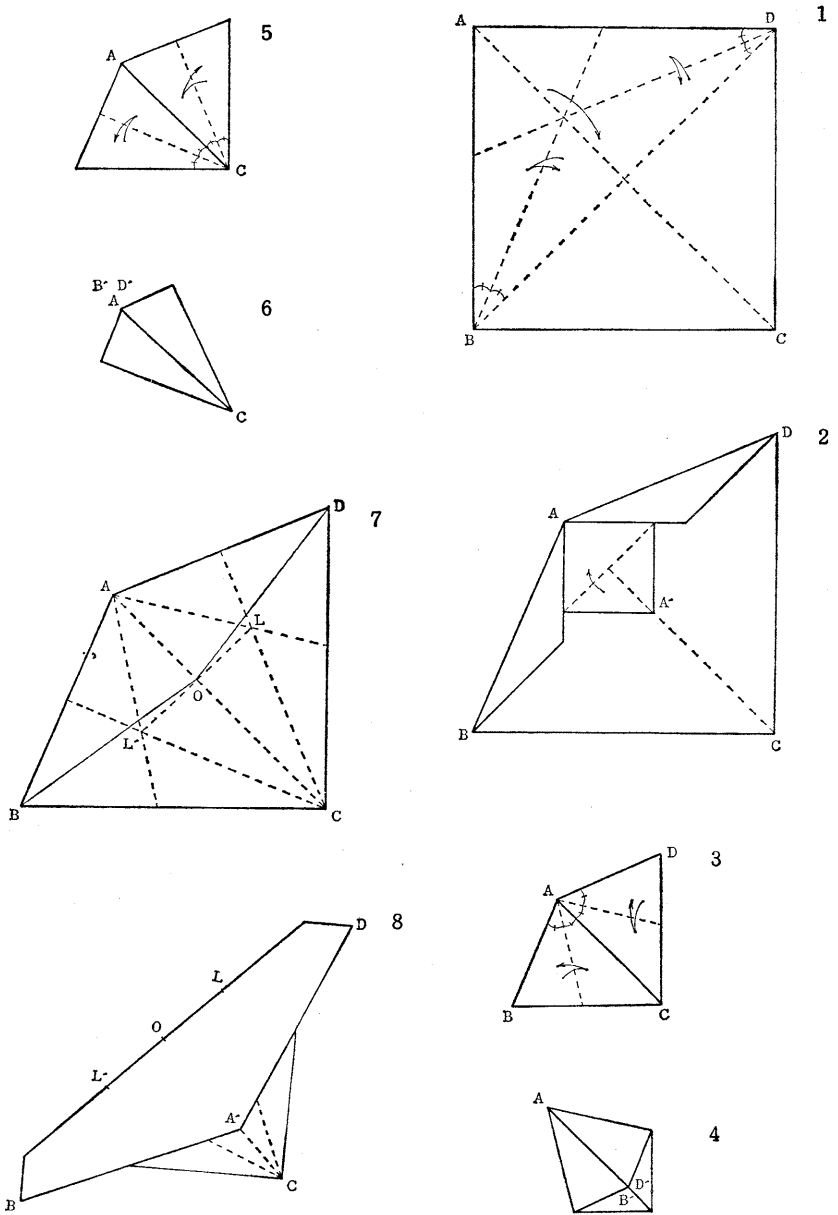
(図4の2)

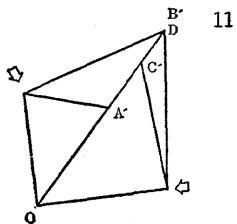
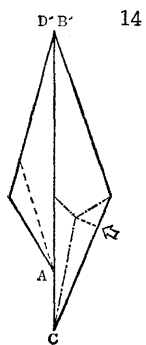
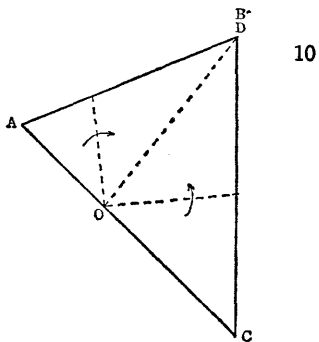
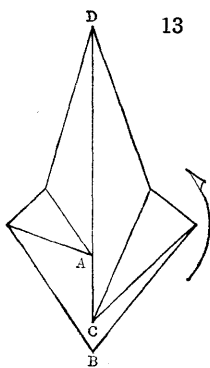
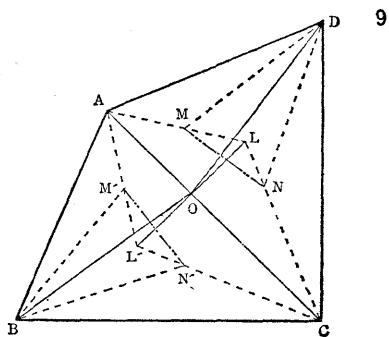
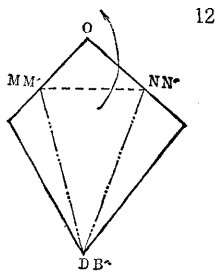
A'は、新しい角Aの方に折り上げます。こうして折り上げた形は、長崎地方のタコー「長崎のハタ」に似ています。

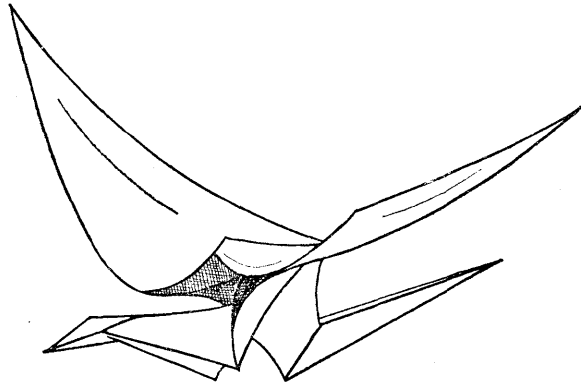
この「長崎のハタ」を飛ぶ折り鶴の出発点とします。

対角線A'Cを折り、元に戻します。三角形ABCと三角形ADCの内心L、L'を決めるために、図4の3、6のように、角の二等

图 4







飛ぶ折り鶴

分線を折り、その交点をおのおの見つけます。

L、L'が決まったら、LとL'を結びます。(図4の8)そしてLL'とACとの交点Oが、これから折る鶴の背中の中心になります。

交点が見つかったら、展開図(図4の9)のように、それぞれの角を二等分して、折目をつけます。

伝統折り鶴の方法をしても結果は同じですが、ここで新方式の折り方を試みます。

「長崎のハタル」を対角線ACで折り、DとBを合わせます。次にOとD(B)を結びます。(折らなくても、仮に別な紙をあてて、線をさがしてもよい)

Oを起点として、O上にCを合わせて折目をつけ、次にAを合わせて折目をつけます。

Oを山折りして元に戻し、外側に作った、大小の三角形を中割り折りにします。

中心Oが上になるように置き直し、BとDをそれぞれ上方に折り上げます。

前に展開図のところで、谷折り線にはっきり折目をつけてあるので、14のように容易に折り上げることができます。

小さい重い部分が頭部になり、長い部分が尾になります。尾は、はばたく鶴のようにします。なお、頭や背中、KM式仕上



げです。

私は部屋の中が飛ぶ折り鶴でいっぱいになった末に、三角形  $A$   $B$   $C$  と三角形  $A$   $D$   $C$  の内心を結び、対角線  $A$   $C$  上に  $O$  点を見出ししました。そして  $B$  と  $O$  によって分けられた四つの三角形のそれぞれの内心  $M$   $M'$ 、 $N$   $N'$  との間に美しい幾何の定理があることを発見しました。その時の喜びは忘れられません。

つまり、 $O$  は  $M$   $N'$  と、 $O$   $D$  は  $M$   $N$  と互いに垂直に交わるのです。このことは、飛ぶ鶴を伝統折り鶴の方法に従って、美しく仕上げられる最後の決め手となりました。

### 文を終る前に付け加えたい事

一、折鶴を飛ばすには、技術的な研究が必要で、まっすぐ押し出すようにして、手をはなすのがコツ。それはスポーツの訓練と同じで、自分の手に伝って来る特別な快感を覚えるまで練習を重ねる。

二、紙の材質（和紙より西洋紙の方が滑らかでよい）大きさ、重さ等で飛ばす力の入れ方が違って来ることも経験を重ねて修得する。

三、相手があつた方が、互いに情報を交換して改良が出来る。また喜びも分かち合い、楽しい運動にもなつて、進歩が早いと思

う。

四、口先は方向舵になるので、曲がるとまっすぐには飛ばない。何回も飛ばした後は、正しく整形をする。翼も尾も同じことが言える。

五、長く飛行させる為には、翼の表面は平らな方がよい。翼の後縁は一直線になるように親指と人差し指でしごく。翼の先端に向けて上り気味（上反角という）で後退翼になるようにする。

六、原則としての飛ぶ条件は、真上から見た時、正面から見た時、左右が対称になっていることが大事です。この為には最初から正確に折つて行くこと、また中割り折りのように、一度折り目をつけてから折り直すと美しく折れる。

何度も間違つた折り方をした時は、新しい紙で最初から折り直した方がよく出来る。

七、子どもは正確には出来ないから、二枚の紙を用意して、一回毎に大人と子どもが交換しながら折ると、正確に折つた結果がわかり、正確に折る努力が始まる。そして大人も子どもも同時に二羽の飛ぶ鶴が出来上る。

上手に折り上がり、そして飛べたら、次はちょっと厚手のハートロン紙で、五〇センチ平方位の大きい正方形を作り、折り上がったら高い所から力一杯飛ばしてみましよう。

（了）

お茶の水女子大学幼児保育現職研究会のおしらせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定ですの  
で、希望の方は左の要項で申し込んでください。

一、昭和五十三年五月より、週一回、定期的開催する。

一、お茶の水女子大学の教官が担当する。

一、午後六時―八時とし、一年間継続する。

一、定員 六十名

一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者、一年間

継続可能な者。

一、規則書ご希望の方は左のようにお申し込みください。

東京都文京区大塚二―一―一 (〒112)

お茶の水女子大学家政学部児童学科内

幼児教育研究室、現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、五十円切手を同封して封書で申し込む

こと。

幼児の教育 第七十七巻第三号

三月号 ◎ 定価二二〇円

昭和五十三年 二月二十五日 印刷

昭和五十三年 三月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売  
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良がございましたら、おとりかえいたします。

園文庫や 保育室に ぜひお備えください。

# キンダー おはなしえほん傑作選

第1集・第2集 各集10冊入 各7,000円 L判 厚表紙 美麗ケース入  
○キンダーおはなしえほんの中で、特に好評だった物語を選んでいきます。



## 第 1 集



1. うりこひめと あまんじゃく
2. あざらしチック
3. こびとと いもむし
4. タオルおばけ
5. おりづるの うた
6. おにがわら
7. かしのきホテル
8. あんぱんまん
9. あいたたせんせい
10. 五つのはなのえき

## 第 2 集



1. さよならジャンボ
2. かぜの かみと こども
3. きたかぜの くれた テーブルかけ
4. げんこつやまの あかおに
5. なしうりと おじいさん
6. ぞうのはな
7. とうもろこし だろぼう
8. ロンロンじいさんの どうぶつえん
9. わらの うし
10. あめだまを たべた ライオン

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 TEL 東京 (03) 292-7781(代) にお問い合わせください。

# フレーベル館

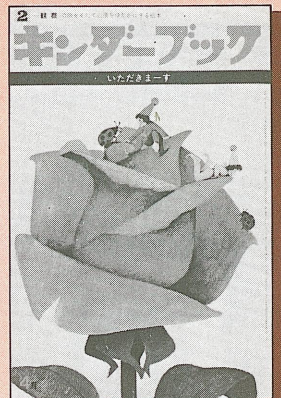
# 53年度 フレーベル館の 月刊7誌

“大きく、ゆたかな子どもに育つことはしたい”

この願いが、たゆまぬ研究、新鮮な企画となり、キンダーブックの長い歴史を築いてきました。今年から『キンダーメルヘン』を創刊し、絵本の領域を広げるとともに、各誌内容をより充実させました。(価格はいづれも据え置きといたしました。)



情緒をゆたかにし創造力をのばす  
**キンダーブック ①-情緒**  
4月号 “はやく おおきく なあれ”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円



観察の眼をそだて心情をゆたかにする  
**キンダーブック ②-観察**  
4月号 “いただきまーず”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円



科学する心を育て自然に親しませる  
**しぜん-キンダーブック ③**  
4月号 “たんぽぽ”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円

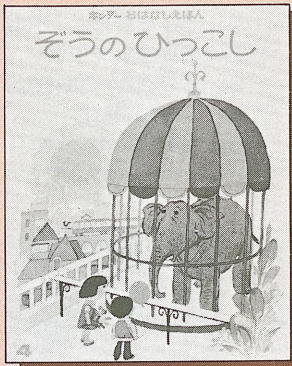
## 創刊

〈4歳児向〉



幼児らしい夢をそだてる絵本  
**キンダーメルヘン**  
4月号 “くまのくつやさん”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円

AB判・厚紙製本



幼児の美しい心を育てる  
**キンダーおはなしえほん**  
4月号 “ぞうのひっこし”  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 200円



保育をゆたかにする **保育専科**  
実践的保育専門誌  
4月号 “自由遊び”の楽しさむすかしさ  
特集 ○新学期をうまく乗り切る方法  
定価 300円

園児をもつ両親のための専門誌  
**ホームキンダー**  
4月号 特集 つけ・子育ての第2ステップ  
—家庭のルール 社会のルール—  
団体購読価 200円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**